

～こどもたちの「生きる力」を
育むため、園庭や地域の
森林等の整備・緑化を推進する～

こどもの森づくり フォーラム in SAITAMA



目次

Forum

Sub working group

Side Event

Partner

【ご挨拶】	01
【プログラム概要】	02
【フォーラム】	開会式（主催者挨拶・来賓挨拶・来賓紹介）	...04
	基調講演（汐見 稔幸）	...06
	先進事例発表Ⅰ ①「児玉の森こども園」	...08
	②「浦和ひなどり保育園」	...09
	③「花の森こども園」	...10
	先進事例発表Ⅱ ①「岐阜県立森林文化アカデミー」	...11
	②「長野県」	...12
	パネルディスカッション	...13
	閉会式（次期開催県挨拶・閉会挨拶）	...15
【分科会Ⅰ】	①「浦和ひなどり保育園」	...16
	②「上田女子短期大学附属幼稚園」	...17
	③「認定こども園さざなみの森」	...18
	④「伊那市立高遠第2・第3保育園」	...19
	分科会Ⅰ ディスカッション	...20
【分科会Ⅱ】	①「岐阜県立森林文化アカデミー」	...21
	②「都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター」	...22
	③「きまま工房・木楽里」	...23
	④「ウレシパモシリ」	...24
	分科会Ⅱ ディスカッション	...25
【サイドイベント】	エクスカーション	...26
	森のプレーパーク 小鹿野町	...27
	木育ひろば 秩父市	...28
	パネル展示	...29
【アンケート結果】		...30
【関係団体紹介】	□ (公財)イオン環境財団	...32
	□ 積水ハウス(株)	...34
	□ 第75回全国植樹祭埼玉県実行委員会	...36
	□ (公社)埼玉県緑化推進委員会・秩父市・ 小鹿野町・岐阜県立森林文化アカデミー	...37
	□ (一財)日本森林林業振興会・(一社)東京林業 土木協会・(公財)ニッセイ緑の財団	...38
	□ (公社)国土緑化推進機構	...39
	□ 林野庁・(特非)子どもの森づくり推進ネットワーク	...40
【資料】	実行委員会名簿／アーカイブ（動画・資料）	...41

この度は、こどもの森づくりフォーラムに県内外から多くの皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃より緑の募金などを通じて、国土緑化運動にご支援・ご協力を賜り、改めて御礼を申し上げます。

さて、このフォーラムは、令和7年に埼玉県で開催されます第75回全国植樹祭の関連事業として、「こどもと森づくり」をテーマに、秩父宮記念市民会館をメイン会場として全国初の取り組みをスタートさせます。



埼玉県南西部は古くから西川材の産出地として知られており、特に江戸・明治以降、西川林業として栄え、現在も西川材の供給を通じて人と森の関係が続いております。

一方、戦後以降の高度化複雑化する社会経済状況の中で、私たちと森との関係は分断され、特に子どもたちが体得すべき森の体験が窮迫となり、生きる力を得る機会が消失しているように思います。

埼玉県には経済の中心であり多くの人々が暮らす都市と、幸いにも多くの森が残されている農山村が存在しています。そうした意味において埼玉県は、子どもたちが森との関係を再構築し、生きる力を身につける可能性を秘めた、絶好の地にあると言えます。

本日は基調講演に東京大学名誉教授の汐見先生にお越しいただき、御礼申し上げたいと思います。

またパネルディスカッションコーディネーターの東京農業大学名誉教授の宮林先生と秋草学園短期大学准教授の北澤先生をはじめ、発表いただく石田先生、丸山先生、葭田先生、萩原先生、長野県の麻見様、埼玉県の浅海様にはどうぞよろしくお願いいたします。

国土緑化推進機構では全国植樹祭の開催を契機に、子どもと森づくりに着目した運動を推進していくこととしております。皆様方の引き続きのご支援ご協力をお願いいたします。

結びに、このフォーラムの開催にご尽力いただきました埼玉県・秩父市・小鹿野町をはじめ関係者の皆様に御礼を申し上げ、私の挨拶といたします。ありがとうございました。

こどもの森づくりフォーラム実行委員会
実行委員長
公益社団法人国土緑化推進機構 専務理事
沖 修司

プログラム概要



全体プログラム

開催日	開催時間	プログラム	会場	詳細ページ	来場者数(人)	
7月8日 (土)	10:00~16:00	森のプレーパーク	小鹿野町「みどりの村」	P.27	134	
	10:00~17:00	エクスカーション	さいたま市「浦和ひなどり保育園」 秩父市「花の森こども園」	P.26	40	
7月9日 (日)	10:00~15:00	木育ひろば	秩父市 「秩父宮 記念市民 会館」	けやきフォーラム	P.28	171
	10:00~12:30	分科会Ⅰ・Ⅱ		会議室1・2	P.16-	87
	13:30~17:00	フォーラム		大ホール	P.04-	363
	9:45~17:15	パネル展示		エントランスホール	P.29	-

延べ来場者数：795人

分科会

日時：2023年7月9日（日）10:00~12:30

場所：「秩父宮記念市民会館」2階会議室1・2（埼玉県秩父市熊木町8-15）

分科会Ⅰ「NPO・地域組織・行政・保護者等との連携で広がる「こどもの森づくり」」

【1】開会	
【2】先進事例発表 ・質疑応答	①「浦和ひなどり保育園」（埼玉県さいたま市） 丸山 和彦（浦和ひなどり保育園 園長） ②「上田女子短期大学附属幼稚園」（長野県上田市） 新增 由香（上田女子短期大学附属幼稚園 園長） ③「認定こども園さざなみの森」（広島県東広島市） 難波 元實（認定こども園さざなみの森 理事長） ④「伊那市立高遠第2第3保育園」（長野県伊那市） 下島 直美（伊那市立高遠第2第・3保育園 園長）
【3】ディスカッション	《進行》北澤明子（秋草学園短期大学 准教授） 《登壇者》事例発表者
【4】まとめ・閉会	

こどもの森づくりフォーラム

総合司会

2023 ミス日本みどりの大使

上村 さや香



分科会 II 「森林・林業関係者/自然体験・野外教育関係者等による「こどもの森づくり」の支援」

【1】開会	
【2】先進事例発表 ・質疑応答	①「岐阜県関市等の公立保育園への裏山等整備の支援」 萩原・ナバ・裕作（岐阜県立森林文化アカデミー 教授） ②「自然ふれあい施設での園受入や園等の裏山整備の支援」 佐藤 洋（都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター） ③「林業関係者と保育関係者が協働で、園の自然保育・木育等を支援」 井上 淳治（きまま工房・木楽里 オーナー） 高橋 京子（ウレシパモシリ 主宰）
【3】ディスカッション	《進行》宮林 茂幸（東京農業大学 名誉教授）《登壇者》事例発表者
【4】まとめ・閉会	

フォーラム

日時：7月9日(日) 13:30~17:00

場所：「秩父宮記念市民会館」大ホール フォレスト

【1】開会	
【2】基調講演	「森で育む・森が育む 子どものチカラ」 汐見 稔幸（(一社)家族・保育デザイン研究所 代表理事、東京大学 名誉教授、全国保育士養成協議会 会長、日本保育学会 理事(前会長)）
【3】先進事例発表Ⅰ (県内園による活動事例)	1「児玉の森こども園」（埼玉県本庄市/都市近郊事例） 石田 雅一（児玉の森保育園 理事長） 2「浦和ひなどり保育園」（埼玉県さいたま市/都市部事例） 丸山 和彦（浦和ひなどり保育園 園長） 3「花の森こども園」（埼玉県秩父市/山村部事例） 葭田 昭子（花の森こども園 園長）
休憩	
【4】先進事例発表Ⅱ (行政・教育機関等による支援事例)	1「岐阜県立森林文化アカデミーmorinos」による支援事例(森林・林業分野) 萩原・ナバ・裕作（岐阜県立森林文化アカデミー 教授） 2「信州型自然保育認定制度」等の創設による支援(行政機関) 麻見 太生（長野県 県民文化部 こども若者局 こども家庭課 家庭支援係）
【5】ディスカッション	「保育・教育関係者と森林・林業・地域関係者等の連携で広げる「こどもの森づくり」 《進行》宮林 茂幸（東京農業大学 名誉教授） 北澤 明子（秋草学園短期大学 准教授） 《登壇者》基調講演者、事例発表者 浅海 殉也（埼玉県 全国植樹祭推進課 副課長）
【6】閉会	

開会式



▲知事挨拶



▲開会式

主催者挨拶

埼玉県知事

大野 元裕

こどもの森づくりフォーラム in SAITAMAを開催をさせていただきます、本日は多くの皆様にご出席を賜り、誠にありがとうございます。また本フォーラムの開催に向けてご尽力をいただきました国土緑化推進機構の沖修司専務を始めとする関係者の皆様に対し、改めて心から感謝を申し上げます。

令和7年には天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、秩父市、小鹿野町にまたがる秩父ミュージックパークにおいて「第75回全国植樹祭」が開催されます。これを契機に、幼稚園や保育園など、子どもの頃から森と緑に親しんでいただくための取り組みを推進、普及のため、本フォーラムを開催させていただくこととなり、本日は幼児教育や保育に携わる関係者の皆様をはじめとする多くの皆様にご出席をいただきました。

埼玉県では、奥地に残る原生林、山地・丘陵地のスギやヒノキ、さらに平地林にはコナラやクヌギといった多様な植生が見られます。これらの緑や森を、元気なまま未来へ引き継ぐことを、この植樹祭における目的の一つに明記させていただきました。

そしてこれを推進していくために、小学校・幼稚園・保育園において植樹祭で活用させていただく苗木のスクールステイを進めていただいております。苗木のスクールステイで、水やりをする子どもたちの姿や、芽を出す時の感動が、様々な地域から伝えられています。引き続き皆様にご協力をお願い申し上げます。すでにご協力をいただいている112の団体の皆様に対して、改めて心から感謝を申し上げます。植樹祭の成功、そしてこれを契機とした埼玉県における美しい緑と、多くの人たちの共生がさらに進みますことを心よりお願い申し上げます。

秩父市長

北堀 篤

私たちが小さい頃は自然と森があって、神社やお寺の境内や山の中で遊んだ記憶がございます。特に今の時代、森の大切さを語る上で気候変動が大きな課題となっておりますが、「緑のダム」という言葉があったり、森林の少ない都市部から排出された二酸化炭素の吸収は、山間地域の森林によって補完されております。

私たちが生きていくために必要なこの水や環境を育むため、森林をきちんと整備していかなければいけませんし、そのために保育園・幼稚園の時代から、子どもたちに森の大切さを教えていただきたいと思います。

また、秩父市において人口減少、食料の自給率や食の安全という課題があります。秩父市は、4月から農林部を設置し、有機農業・オーガニック食材に取り組んでいこうと今進めさせていただいております。



来賓挨拶

本日講演いただく汐見先生は、幼児の保育学の観点から研究を重ね、広く全国の方々へその力説を解いていただいております。

この秩父地域も今、何かアクションを起こしていかないとこれからの子どもたちに負の遺産を残すこととなります。川の下流の地域の方にも、上流の水源の大切さ、森の大切さというものを教えていただきたいと思います。童話の中にはいつも動物や森が出てきます。ぜひ、森林を活用した子どもたちの教育にお力添えいただきながら、今日1日皆さんがこのフォーラムを通じて何かを感じ取り、次の世代へとつないでいただければと思います。

最後に、全国植樹祭におきましても、皆さんが県内で多くの方々に語り継いでいただき、機運の醸成と、植樹祭の開催により天皇皇后両陛下をお迎えしながら、森林の教育ができるようお力添えいただけますよう、お願いを申し上げます。



来賓挨拶

埼玉県議会 議長

立石 泰広

令和7年に本県で開催される全国植樹祭は、豊かなみどりを県民全体で次の世代に引き継ぐという機運を高めるとともに、埼玉県の豊かな自然や歴史・文化等の魅力を全国に向けて発信する絶好の機会となります。

豊かなみどりと、「日本三大曳山祭」に数えられる秩父夜祭や小鹿野歌舞伎など多彩な文化や歴史などを有する秩父市、小鹿野町での開催は大変意義深いものであると感じております。

本年2月の県議会定例会では、全国植樹祭について質問がなされました。そこで確認されたことは今回の全国植樹祭を広く秩父地域の方々に認識していただき、さらには秩父地域だけでなく県内に広く参加意識を持っていただくことが重要だということでした。埼玉県全体で機運を高めていくことがとても大切であります。本日、本フォーラムが植樹祭関連事業として開催されますことは、まさに県民の参加意識の向上に繋がるものであると考えております。開催に御尽力された関係者の皆様に、感謝と敬意を申し上げます。

全国植樹祭を成功させるとともに、豊かなみどりを次の世代に引き継いでいくためには、多くの方の御理解と御協力が必要となります。本日御出席の皆様におかれましても、引き続き御協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。県議会といたしましても、みどり豊かな県土づくりや、子どもたちの健全育成に全力で取り組んでまいります。私も全国植樹祭埼玉県実行委員会の副会長として、大会の成功に力を尽くして参る所存でございます。結びに、御出席の皆様の御健勝、御多幸と本フォーラムの大成功を心から祈念いたしまして、お祝いの挨拶とさせていただきます。

主催者・来賓紹介

※ご臨席いただいた皆様のお名前をご紹介します。（*敬称略）

実行委員
ご来賓

小鹿野町 町長

埼玉県議会 議員

埼玉県議会 議員

秩父市議会 議長

小鹿野町議会 議長

森 真太郎

新井 豪（代理）

阿左美 健司

堀口 義正

加藤 喜一

基調講演



▲動画リンク

「森で育む・森が育む子どものチカラ」

私は、かれこれ30年前になりますが、子どもが小さい時に八ヶ岳の麓に山小屋を作って、土日や夏休み等長期休暇になるとそこへ行って子どもを育てました。

きっかけは、公団住宅に住んでいた当時、真ん中の息子が「庭って何？」って聞いてきたことです。

「にわかにならんなあ」なんて言ってね（笑）。

子ども達が大きくなった時、人間がますます都市化された空間の中で、自然と深く関わらなくても生きていける。そのことを私は一つの危機だと思って、子どもを自然の中に連れ出しました。

今日はそんな経験をしてきた私が森って人間の何を育てるのか、森の中で子どもの中に何が育つのかということ、皆さんと考えてみたいと思います。



森って私たちにとって何なのでしょう？

国分寺駅前に高いタワーマンションが2棟できました。どこの駅前にもありそうな建物です。最上階は今、1物件3億円だそうです。日本の駅前って全国どこも同じ、ということに気付いた外国人が日本の駅前を写真集にして出しているそうなんです。日本は本当にもったいないことしてる、って。

でももし「国分寺駅前に大きな森をつくろう」と言ったらどう思いますか？ 全国から素敵な樹木を集めて森にして、その中にオフィスを作る。オフィスビルは樹木より高く建ててはならない。建物同士を繋ぐ道は、森の獣道のように曲がった道で、緩やかなカーブを基調とする。森の中にカフェがあり、小さな水辺やフラワーガーデンもある。そういう森が駅前の繁華街であり商店街だったら、皆さんどっちで仕事したいですか？

なぜ森は人間の心を鎮め、落ち着かせるのでしょうか？

自然の中に絶対ないのは「直線」なんです。宮崎駿さんも養老孟司さんとの対談本『虫眼とアニメ』の中で同じことを語っています。もし森の中で、獣道が2キロくらいまっすぐに見えてたら皆さんどう思います？ 獣道は、「こっち歩きやすい、あっちに餌がありそうだ」って獣が歩いて行って、いつの間にかできるんですね。不思議なことに、幼児たちに物をまっすぐに並べてって言うと必ず曲がるんです。お芋一列に並ばせようと思ったら必ずちょっと曲げちゃう、それが獣道とそっくりなんです。獣道っていうのは人間の美意識の原点だって私は思っているんです。直線や真っ平な平面のない世界。これが自然です。

人類は20万年の長い歴史の中で、自然の中で生活し、曲線の織り成す世界と接してきました。人間の脳が視覚情報を処理する時、大きな直線には対応していないんです。大きな直線でできた都市の世界にいると、直線を処理する脳に無理が生じるので疲れる。それは、音でも同じです。川の水音、風の音…均質的・一定ではなく、ゆらぎがあります。逆に、緩やかな曲線の、ある種のバランスや配置に一種の快感を感じるようになっていて、ゆらぎがあるから私たちは自然っていいな、って思うわけです。のっぽビルが立ち並ぶ都会で、心を休めよう、鎮めようという人はいません。都市化は人間の中の自然と逆のことをやっているからです。人工物って、人間をある面で興奮させてしまう。だから疲れたら皆、自然の中へ逃げていきますよね。私は都市っていうのはあっていいと思っていますが、過剰に高いビルを立ててまっすぐなものや真っ平らなものを作るよりは、都市に自然を持ち込んでほしいと思います。

汐見 稔幸

社会は勝手な制度や規範をいっぱい作って、点数・偏差値なんて自然の中になく人間を競争させるわけです。のっぽビルの刺激を求めようとする人は、人工的で点数・偏差値を上げることに生きがいを感じる感性と表裏一体ではないでしょうか。「人間の自然性」＝「人類の長い経験のつくった感性」が隠れてしまって、社会でつくられた規範に過度に同調している可能性があります。

だから国分寺の駅前に森を作ろうという感性を育てることと、点数・偏差値的で業績を競いあう社会の価値観の転換って、セットでやっていかなきゃいけない、本当にこれは世直しだなんて思います。

自然と人間の生理、いのち

NHKの番組で、大学の運動部の学生に、渋谷のハチ公前と筑波山の山麓の二ヶ所で実験をしました。自転車を強く漕いで心拍数が180まで上がったらストップします。元の心拍数に戻るまでの時間を計測して比較すると、正常値に戻るまでの時間は、筑波山の山の中の方が3倍も早かったのです。

理由は、森があるかどうかの違い。樹木が自らをウィルスなどから守るために出す「フィトンチッド」を皆さんはご存知かもしれませんが、人間の疲れの要素である乳酸の分解に働くと言われています。沐浴が健康によいと言われていいるのもフィトンチッドの影響です。

森（自然）と多様にかかわることで子どもに育つもの

森一つつまり樹木、草、でこぼこの土地、水たまり、日陰、木洩れ日、におい、風。これらの環境で遊ぶことで何が育つのでしょうか？ 身体の筋肉を多様に使うので、しなやかな筋肉の育ち、神経系のはたらきの良さ、バランス感覚等の育ち、これは言うまでもありませんね。

森のようちえん卒園児の非認知的特質の傾向

興味深い調査結果が出ましたのでご紹介します。長野県にある森のようちえんで行った大学世代の卒園児の追跡調査です。国と同じ質問項目で行ったところ、大きな差が出ました。（右表）

ドイツの森のようちえんでも、一般幼稚園児の比較研究がありますが、森のようちえん児に高かったのは、実は「コミュニケーション能力」という結果があります。森の中で遊ぶ時には「ちょっと待って危ないよ！」とか、その瞬間に上手に相手に分かる言葉で的確に伝えなければ、安全に遊べません。これってコミュニケーションの練習をしているんじゃないかっていうことなんですね。

興味深い調査の結果です

●研究者 下村一彦、宮崎温氏ら5人
< 大学世代となった「森のようちえん」卒園児の非認知的特質の傾向
—K幼稚園（長野県）卒園児の追跡調査を通して— >
●森のようちえんの卒園児32人（現13歳から28歳）に国の調査と同じ
項目調査結果

	森のようちえん卒園児	国調査
①自己肯定感の高さ		
「今の自分が好きだ」	74.4%	46.5%
「自分には自分らしいところがある」	94.9%	70.6%
「親から愛されている」	97.4%	73.7%
②参加意識の高さ		
「うまくいくかわからないときにも意欲的にとりくむ」	79.5%	49.0%
「自分の考えをはっきりと相手に伝えることができる」	71.8%	51.9%

最後に

人間は20万年、裸足で自然の中で走り回って生活してきました。子どもたちが森や自然の中で活動すると、人類が永く自然と格闘し、共生しながら手に入れてきた資質や能力が伸びる可能性は十分あると考えられます。これを今の言葉で言うと「非認知的能力」といいます。健康と知恵、やりくり力、コミュニケーション能力、忍耐力、レジリエンス、好奇心。森の自然の中で子どもたちが育つことによって非認知的な能力が豊かに育っていくのだと思います。





▲動画リンク

①「児玉の森こども園」

(埼玉県本庄市 / 都市近郊事例)



～園庭緑化と近隣フィールドを活用した自然保育と植樹活動～

「自然への興味が子ども達の主体性を育てる！」

社会福祉法人 呉竹会 理事長

児玉の森こども園 理事長

石田 雅一



◀発表資料



ここから1時間程車で行った本庄市で「児玉の森こども園」を祖父の代から始めて66年になります。昔から園庭に木を植え、植樹活動も随分行ってきました。東京は待機児童が多いので、現在は本庄市の他に新宿1園、世田谷2園、合計4園の保育施設を運営しています。

4園に共通する理念は、生活の中で子どもたちの発達を促すこと、自ら選んで行う自発的な活動を促すこと、「自立」を育てること、そして集団の中で協力して多様な人と関わる力を育てることです。「自然や生命・空間を感じられる子ども（環境と共存できる子ども）に」という保育目標は、特に4園の保育の基本であり子育ての基本と定めています。

当園は「環境を通して行う保育」に非常に力を入れているので、森や自然だけでなく屋内の保育環境も、子どもが自ら好きなもの、やりたいことを選んで遊びを見つける、ということを大事にしています。

かつて保育園は、一斉に「こうしなさい」という保育をしていましたが、今は自分が何をしたいか、今日をどう過ごしたいかを子どもが選ぶ自発的な活動を大事にしています。

食事は「子どもキッチン」で、給食作りに子どもが積極的に携われるようにすることで、食への関心を高めます。大人がしつめたわけではないのに、上の学年の子の姿を見ると、やりたくなって1歳児が自分の食器を進んで片付けるようになります。強く教え込まなくても、片付けなくなる環境設定で、子どもたちは主体的にできるようになるんですね。

児玉の森こども園の園庭には木があり、木陰があります。計測してみると他より2～3度下がるので、こんな環境で毎日木登りを楽しんでいきます。この木はさくらんぼがなるので、これを食べたいがためにみんな努力して木登りをするんですね。いつの間にか力がつき、登れる子は落ちません。乗せた子は落ちちゃうので、職員は登れない子を木に乗せるということは絶対にしないんです。

コロナで中断していましたが、今年度からまた「こどもの森づくり」運動として地域にある公園へ植樹を続けていきたいと考えています。

屋外の自然には、意図的に設定される室内環境と違って、自然物との関わりの中で、子どもたちが自ら考えて決めて遊ぶ環境がたくさんあります。自分が考えることで意欲を高め、そして遊ぶことが大きな育ちを支えるのではないのでしょうか。都内のどんな小さな園にも必ず一つは木を植えてあり、そこは木登りOKにしています。そんな環境の一つでも保育園で増やしていけたらと思っております。



②「浦和ひなどり保育園」

(埼玉県さいたま市／都市部事例)



～保育者・地域住民等参加による園庭・社寺有林の整備等～

「どんぐり山の自然体験」



◀発表資料

浦和ひなどり保育園 園長
丸山 和彦

昭和13年に農繁託児所からスタートした私立保育園で、私は三代目の園長、ここの卒園児でもあります。実はあまり保育園が好きではなかった私は、もっと居心地がいい保育園にしたいと、園長になった平成15年頃から少しずつ保育を変えていきました。平成19年にどんぐり山での自然体験活動がスタートし、約2000平米ある隣のお寺の山をお借りして園庭として使わせていただいています。乳児の足でも歩いて5分ぐらいなので、夏の蚊が多い時季以外は、ほぼ毎日ここで活動をしています。

私たちが活動で特に大切にしているのは以下の3つです。1つ目は、とにかく子どもが豊かに遊ぶこと。五感を通した遊びの中で「自然って美しい、楽しい」というのを存分に味わってもらうことです。2つ目が山の恵みを生活に活かすこと。山の中にある落ち葉や木などをどんどん保育室内に持ち込んで使ったり、逆に園の室内でやっていることを自然の中に持ち出したり。朝の会やアート活動、お弁当、卒園式なんかを山の中でやっています。3つ目は様々な人が参画すること。本当にいろんな人たちがこのどんぐり山に関わって整備や活動を助けてくれているんですが、山での活動を通して人と人が結びつく場になるよう活動を意識しています。当初、山で遊ぶというアイデアが出たものの、自然に対する知識がなかったので埼玉県の生態系保護協会さんと連携してスタートアップの支援を受けたり、資金面で紹介をいただいたり、活動ノウハウ面では専門家に害虫問題やリスクマネジメントの指導いただき、その後保護者と一緒に活動場所の整備や遊具を作っています。

そして、自然体験から得た子どもの育ちについて感じることは、以前は汚いからと抵抗感があった土の上に、子どもたちが寝転べるようになったこと。2つ目が情緒の安定。3つ目は不確実性のあることへのチャレンジ精神です。また0・1歳児の成長は、見学の方から1歳児が赤ちゃんぽくなく遅いという言葉を実によくいただきます。

最後に自然体験から保育者が得たものです。1つ目がポジティブな子ども観。自然遊びをスタートした時は「危ない危ない！」と大人・子どもの距離がとても近かったのが、だんだん、これくらいなら大丈夫、と見守れるようになってきました。2つ目は、生活や遊具を自分たちで作るDIYの精神。3つ目に、我々保育者や大人たちもまたたくさん頂いていたのが心の安定でした。コロナ禍で厳しい時でも、山から子どもたちの笑い声が聞こえてくるとすごく癒されたんですね。最後に、もし予算があれば今年、水辺のビオトープを園庭に作りたいたいと計画中です。



先進事例発表 I



▲動画リンク

③「花の森こども園」

(埼玉県秩父市 / 山村部事例)



～保護者・地域住民参加による裏山整備、園舎への
県産材利用等～

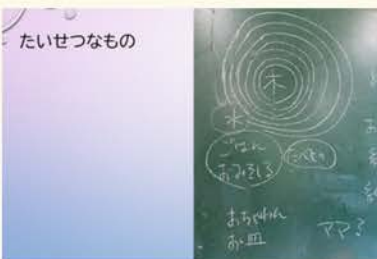
「こども園発 森は地域の プラットホーム」

花の森こども園 園長

葎田 昭子



◀発表資料



私たちは元々2008年に認可外の自主保育の保育活動団体から始まり、2021年4月から地方裁量型の認定こども園として再スタートをしました。定員は28人で、現在1・2歳児と3～5歳児の縦割り保育です。

「いろんな命との共生」を理念に「自然の中で自ら伸びる環境を作っていく、諸感と意感を磨く環境を作っていく。多様性、いろんな命の違いを尊重していけるような環境を作っていく」これを活動指針にしています。我が子が何か優れた能力を身につけるよりも、自由と友愛の幸福感を持つこと。人間も自然界の一部であるという感覚「環境観」の育成を非常に大事にしています。他にも多世代交流カフェとして、地域のお年寄りや、不登校やニートの青年たちが集まる居場所づくり、子ども食堂を行っています。

園舎が建つ前、ここは何年も放棄された約1万400平米の森が広がっていました(左上から2枚目の写真)。何人もいる地主さんに了承を得て、子どもも保護者もみんなで園庭整備を始めました。2019年10月の幼児教育無償化で閉園も迷いましたが、園舎を持つ決断をし「嘘800万プロジェクト」を立ち上げて資金を集めました。他にも助成金や融資、企業のNPO基金を受け、遊歩道なども作らせていただきました。園舎は県産材の利用補助金と過剰木材の在庫利用緊急対策事業の助成を得て、木を使った園舎を建て、市町で初の認証となる秩父定住型自然保育認証園となりました。

環境整備活動は元々「父親参加日」から始まり「FEEL&WORKS」という月一の会に発展しました。保護者も子どもも、地域の方も自由参加できます。この森に入った時、1本の桜の木の命をいただきました。切る時、木くずを吹きながら倒れていく姿は、本当に命をもらっているという衝撃的な体験でした。私たちはここから、森に対して「お邪魔します」の気持ちと謙虚さを絶対に忘れずいこうと、森の活動をしています。

最後に、子どもにたいせつなものは何かと聞いたら「あっこ(葎田氏の呼び名)はメガネだろう? 自分は木だ」と(写真左下)。何と比べても一番は「木」でした。ママよりも。「木がなかったら生存できないから」だそうですが、花の森こども園で育ったからこそだなと思いました。そしてもう一つ「大切な人ってどんな人?」という問いに「一緒に火事を消してくれるような人」と答えました。困った時に一緒に力になってくれる人。「本物の卵焼き屋さんになりたい」と言う彼のように、私も本物を見つけていきたいと思っています。

先進事例発表 II



▲動画リンク

①「岐阜県立森林文化アカデミー morinos」

(森林・林業分野)



～公立園による地域の森林の整備・活用支援、
研修等の開催等～

「森で日本をHappyに！」

岐阜県「morinos(モリノス)」がはじめた保育園
&幼稚園への応援とは？

岐阜県立森林文化アカデミー 教授

萩原・ナバ・裕作



◀発表資料

岐阜県立森林文化アカデミーは、林業、木造建築、木工、そして森林環境教育を実践的に学べる2年制の高等専修学校です。学内演習林から木を切り出し、製材・乾燥・加工して実際に使うところまでのすべてのプロセスをリアルに体験できる小さな村のような学校です。そのキャンパス内に、すべての「人」と「森」をつなぐことを目的とした日本初の森林総合教育センター「morinos(モリノス)」ができました。

ミッションは「日本が森を舞台にHappyな社会になる」。じゃあどうやって？という、教育学者ニールの言葉を借りれば「まずは子どもを幸せにしていこう」ということ。でも、子どもだけを幸せにすればいいわけじゃない。そのためにどうしたらいいかmorinosは4つ考えました。

1：森と子どもがつながる。「つなげる」んじゃないで「つながる」んです。2：せんせいが森とつながる。3：家庭や社会が森とつながる。最後に、4：子どもと自由な遊びがつながる。

具体的には、来訪者向けにプログラムを実施するだけでなく「Morino de Van(森の出番)」というバン(おやじギャグから生まれた)に機材を積み込んで森の遊びを出前することで、子どもと森がつながるきっかけをつくります。出前研修では、座学ではなく、森で子どもたちと一緒に遊びながら実感を通して学びます。子どもが遊ぶプログラムを事前に決めず、子ども中心に、自由に森の中で遊ぶことを大事にしています。僕らの役割は、説明じゃなくて、保育者の「あり方」を見せること。保育でどう伝えたらいいかをお互い見あい、振り返ること。園を超えた交流研修も、岐阜県が音頭を取って森のようちえんも私立も公立も交流しながらお互いの現場で保育を体験する。それをじっくり振り返ると、自分自身の保育観を改めて見つめ直す機会になります。

4つ目の「子どもと自由な遊びがつながる」。子どもが、自由に遊びや空間や家を作ることは、将来自分たちが理想的な社会を自分の手で築くとしてもいい練習になります。考えが違う人と話し合いながら一緒に何かを作り上げる体験は遊びの中にあります。昨日も秩父の小鹿野町で、地域の人とプレーパークをやっていこうとありましたが、素晴らしいですね！「遊び」と言うと日本ではネガティブに捉えられがちですが、実はこれこそがこれからの社会をつくるのに大事。この4つのことを軸に、皆さんの保育で森と子どもをつなぐ活動を応援しています。みんなハッピーに、ポジティブな世の中がいい方向に行ったらいいなと思ってます！





▲動画リンク

長野県
(行政機関)



～認定制度創設、県民税を活用したフィールド整備
支援、移住促進等～

「信州型自然保育認定制度」

(信州やまほいく認定制度)

長野県 県民文化部

こども若者局 こども・家庭課

麻見 太生



◀発表資料

認定制度の特徴	認定の区分
普及型 (255園) 1園間で合計5種類以上、園外を中心とした体験活動が行われている。	特化型 (15園) 1園間で合計10種類以上、園外を中心とした体験活動が行われている。
自然保育+他のプログラムを行う園	自然保育に重点を置いている園

○ それぞれの園の施設や地域のフィールドにあったやり方で「やまほいく(自然保育)」に取り組んでいます。
 ○ 室内でも、自然物を使った製作活動などで「やまほいく(自然保育)」を行います。

長野県では、恵まれた自然環境を生かし、子どもたちが本来持っている「自ら学び成長する力を育てていくこと」を基本理念とする、信州型自然保育認定制度、通称「信州やまほいく」を平成27年にスタートさせ、今年で9年目となります。公立私立を問わず、様々な保育幼児教育施設が認定されているほか、工夫した自然保育を行う市街地の園も認定を受けています。この制度は、どんな場所でも一定の要件を満たせば認定を受けられることから、令和4年10月現在、43市町村、270園が認定を受けています(長野県の市町村数全体の約5割、施設数全体の約3割)。長野県は、77市町村すべてに認定園がある環境を目指し、引き続き普及推進を図っていきます。

区分	フィールド整備	付帯施設整備
補助率	補助率9/10以内	補助率1/2以内
上限額	50万円	50万円
対象事業	森林整備(伐後、間伐、危険木除去等)土壌改良、チップ敷き、草刈整備等(森林整備を主とし、補助し・助成)	トイレ、水道、電気計測機器の整備土壌改良、チップ敷き、草刈整備等

制度の特徴として、活動時間に応じた「普及型」と「特化型」と二つの区分があります。普及型、特化型の園の保育者同士が交流する研修会や、保育者を受け入れる体験型の研修なども実施しており、互いに刺激を受けながら自然保育の質を高められるのも本制度ならではの点です。

続いて、認定対象園への支援制度の一つ、長野県の森林税を活用した整備事業補助金制度です。認定園の活動フィールドで自然保育の安全性の確保、保育環境の向上を図ることを目的に創設し、5年間で計38園の支援実績があります。危険箇所等が整備されたことで、安全管理に係る負担の軽減や、自然保育の幅の拡大に寄与してきたほか、各園のニーズもわかってきました。令和5年度からの5年間も、引き続きこの森林税の活用による支援をして参ります。

年度	支援園数
H30	9
H31	5
H32	10
H33	9
H34	6
計	38

最後に、信州やまほいくと移住支援の連携についてです。移住を検討する上で子育て環境は非常に重要です。そこで長野県では信州やまほいくと移住支援に関する情報をセットで発信し、イベント等の機会を設けています。自治体の声はもちろん、実際に認定園で自然保育をしている保育者の方々の声も聞くことができるため、移住を考えている方々にとって有意義な時間になっているのではないのでしょうか。長野県には77の市町村と800を超える保育幼児教育施設があるため、移住先の絞り込みにあたって、信州やまほいくの認定というのが一つのフィルターになっているかと思えます。実際、この園に子どもを通わせたい、この園に働きたいという思いで移住してきた方もいらっしゃるようです。

イベント名	内容
家庭信州移住セミナー(6/9)	対象：園外の子育て支援等 ・県・認定制度を紹介 ・市町村・子育て支援、移住施策を紹介 ・認定園・やまほいくの自然保育等を紹介
信州で暮らす。劇(フェア)7/22)	対象：園外の子育て支援等 ・高アースで劇の演習や相談にも対応 ・劇・認定制度を紹介
長野NAGANO!あわせ信州やまほいくセミナー(10月開催予定)	対象：園外の子育て支援等 ・認定園・やまほいくの実践事例を紹介

長野県が管理運営するポータルサイト「信州やまほいくの郷」では、信州やまほいくの認定を受けている全ての園の情報をご覧いただけますのでぜひ検索してみてください。

パネルディスカッション



▲動画リンク

保育・教育関係者と森林・林業・地域関係者等の連携で 広げる「こどもの森づくり」①

- 《進行》 宮林 茂幸（東京農業大学 名誉教授）
北澤 明子（秋草学園短期大学 准教授）
- 《登壇》 汐見 稔幸（(一社)家族・保育デザイン研究所 代表理事、東京大学 名誉教授）
石田 雅一（児玉の森保育園 理事長）
丸山 和彦（浦和ひなどり保育園 園長）
葭田 昭子（花の森こども園 園長）
萩原 ナバ 裕作（岐阜県立森林文化アカデミー 教授）
麻見 太生（長野県 県民文化部 こども若者局 こども・家庭課）
浅海 殉也（埼玉県 全国植樹祭推進課 副課長）

【宮林氏】国土の3分の2が森林である日本では、子どもの頃から森林で遊び、森と関わって暮らしを立ててきましたが、だんだんと離れていっているように感じます。自主性を尊重し、協調性を育み、創造性をたくましくしていく。こうした人間づくりが「こどもの森づくり」の大きな理念になっていくのではないかと思います。まずはパネリストの皆様から「こどもの森」の理想像を伺います。

【丸山氏】こどもの森といえば「遊び」。自然は美しい、楽しいということ。乳幼児期にとにかく体感してもらいたいです。大人になった時に思い出すような「豊かに遊ぶ場所」が私の考えるこどもの森です。

【葭田氏】私にとってこどもの森は多様性の森、「還る場所、ホーム」です。元々そこから来ていた事を思い出して、還る場所を持つこと。

【石田氏】保育室内の環境設定を非常に大事にしていますが、森では逆に設定しなくても子どもたちが自分で魅力的なものをどんどん見つけられる「自分で考えられる場所」。自然の中や環境を通じて工夫したり、生み出す遊びは大人には想像の範囲外にあります。

【宮林氏】探検心をくすぐるし、しかも一緒にやろう、という協働協力が生まれますね。協調性を養う大変良い場所。行政側からみて、ナバさんはいかがですか？

【萩原氏】実は行政なんです、県立なので（笑）。子どもと森というキーワードで、その空間をみんなで作るプロセスにすごく意味がある。決して子どもと園だけで作るんじゃなくて、子どもも保護者も縦割りな行政も横につながる、そうしたきっかけになったらいいですね。人類猿だったわけで、猿はみんなで森で子育てしてたようにね。

【北澤氏】午前中の分科会でも、「近所にあった森が子どもたちにとって『僕たち私たちの森』になっていくには？」という問いに、いろんな人と一緒に作っていくことがすごく大事だというお話がありましたね。

【麻見氏】子どもたちが自ら考えて学んでいく場所が、こどもの森だと思います。そのために大人が環境を整えたり活動の幅を広げていく。子どもと大人と一緒に森づくりをするのが大事ですね。

【浅海氏】第75回全国植樹祭の開催に向けて、埼玉県内の112団体（うち60団体が保育所や幼稚園など）が「苗木のスクールステイ」で、コナラやクヌギをどんぐりから育てています。子どもたちから驚きの声が届いていて、この取り組みがこどもの森づくりに繋がるといいなと思います。



Forum

パネルディスカッション



▲動画リンク

保育・教育関係者と森林・林業・地域関係者等の連携で 広げる「こどもの森づくり」②



【汐見氏】 僕が幼児教育の世界にいるのは、小学校行ってからじゃ全て遅いと思ってるからなんです。欧州は自国の教育政策の中で、今一番注力すべきは保育幼児教育だ、と変わってきました。これが日本には伝わっていない。なぜか。かつて日本では生活の中でやりくりする力がある程度勝手に育っていたから。今は、暑い。リモコンピッ。おしまい。一定の学力は必要だけど、いい大学を出たからいい仕事をするとは限らない。例えば相手の失敗に対して、傷口に塩を塗るのではなく、どういふ言葉をかけたら相手が元気になれるかを一生懸命考える。つまり自分が弱い存在であることを知っている人です。あるいは試行錯誤やっても簡単に諦めない人。失敗したら、うまくいかない方法がわかっただけ、と考える人。そういう風に粘り強くやる人間に育った人が、社会人になったら、いい仕事をするデータに出てきている。それが非認知能力と言われています。社会が非認知能力を求めているのに今や勝手に育たないわけです。そしたら教育しかない。いつから育つんだ？ 赤ちゃんからです。小さい時から遊びを工夫する。うまくいかない時に「どうやっ



たらいいんだろう？見捨てはしないから自分で考えてごらん」なんてやってる中でしか育たない。それをやっていくのが保育幼児教育だったら一番大事なのはそこの質を上げること。

さっき葎田さんが、遊びについて「目的があって遊ぶわけじゃない。遊びたいから勝手に身体が動くし作っちゃう。そこには大人の評価も、このスキルが得られるといった損得も子どもの中にはない」とお話ししてくれました。目的を持って〇点取るために勉強するのは能動的なやり方で、逆にさせられているのが受動的なやり方で、「能動」か「受動」かって2つの世界で捉えがちだけど、遊びってそのどちらでもない「中動」なんです。何かのために遊んでるわけでも、遊ばされてるわけでもない。自分でいつの間にか遊んでる。能動でも受動でもない中道の世界がだんだん減ってきた頃から、人間の社会がおかしくなっている。遊びのように、「中動態」は私たちの命の中にあるものが勝手にやってるわけです。それを大事にしていこうとしたら結局こういう世界を豊かにしていくしかない。それを全部まとめて遊びって言ってるわけです。だからそういう意味で、遊びを中心とした一つの場が、今日テーマになってる「こどもの森」だと思うんです。

【宮林氏】 こうした運動を今後どう広げていくかということが大事だと思うんですね。今先生方からもみんなまでやっていこうというお話がありましたが、最後に皆さんから一言ずつどうぞ。

【丸山氏】 今日ここにいない、なかなか一歩が踏み出せない園を地域でどうやって支援していくか、森と保育園をいかにつなげるか、を考えていきたいです。

【葎田氏】 小さく100人位の人が時々集まって話し合うのはすごくいいと思う。子どもにとっても、いろんな大人の姿が見えて、ちょっとずつ広がっていくと、楽しい場所になってくると思います。

【石田氏】 園庭に木を植えると、その分園庭面積が狭くなります。子どもの遊具として木を植えるなど、制度面で仕組ができるといいですね。

【萩原氏】 現場の人たちがまずは楽しむこと。専門家に頼るのもいいけど、自身も森の知識をつけ、森を変えていく楽しさを知り、大人も子どももハッピーに。そんな発信ができればいいですね。

【麻見氏】 長野県では自然保育の社会的認知をもっと広めていく必要があると思います。保育者の持つ願いや自然保育を実践する保育者のあり方を行政としても発信していくことが必要だと思います。

【浅海氏】 埼玉県として初めて行った苗木のスクールステイ。運動として定着していくように、こどもの森づくりを今後に向けて実現をさせていきたいです。

【北澤氏】 今日様々な立場の方と一緒に、森とは、森作りとは何かを話せたということが大きな第一歩だと考えています。そういうことを積み重ねて雑草一つ、木1本から植えていくことですね。

【宮林氏】 こどもの森づくりの輪を広げるスタートラインに立ちました。では、来年度は愛媛県で！

閉会式



▲動画リンク

次期開催県挨拶

愛媛県 森林整備課 課長

俊成 秀樹

第1回こどもの森づくりフォーラム in SAITAMAが、このように盛大に開催されましたことを心からお喜び申し上げます。

小さな苗木が大木へと生長するまでには大変長い年月がかかります。次の世代に引き継ぐ森林を守り育てる人材の育成にも、幼い頃からの時間をかけた取り組みが何よりも大切であるとの思いを強く致しました。人間形成の基礎となる幼児期から、ESD、持続可能な開発のための教育が、今、強く求められております。

今回の皆様方の思いを引き継ぎ、第2回の愛媛県大会を通じ、未来を担う子どもたちが思う存分、森林とふれあい、自ら考え、行動する力を養っていただけるよう、より幅広い分野の皆様方と手を携えて取り組んで参りたいと思っています。

愛媛県は西日本最高峰の石鎚山系をはじめ、豊かな自然に恵まれ、訪れる人の心と体を癒す道後温泉もあります。おもてなしの原点とも言われる四国遍路のご接待の心で皆様のお越しをお待ち致しております。

最後になりましたが、今大会関係者の皆様方に感謝を申し上げ、次期開催県からのご挨拶とさせていただきます。それでは来年ぜひ愛媛にお越しください。



閉会挨拶

小鹿野町 町長

森 真太郎

第1回の記念すべきフォーラムが当地で開催でき本当にありがたく思っております。フォーラムで基調講演や事例発表をいただきました先生方のお話は、とても哲学的かつ奥深い話で、非常に参考になりました。森や自然の中で小さいうちから自然体験を通して学ん

でいくこと。森には力があるのだということをしっかり教育と結びつけていく大事さを学ばせていただきました。

植樹祭も、地元の秩父市はもちろん、埼玉県と協力し、国土緑化推進機構のお力をいただきながら実施できればと思っております。単なる一過性のイベントで終わるのではなく、これを通じて森林資源の大切さを県民にもしっかり伝えていく責務があるのではないかと思います。

今回、林野庁をはじめ国土緑化推進機構、特別協賛としてイオン環境財団、助成として積水ハウスマッチングプログラム等、たくさんのご協賛と助成をいただき、今回のフォーラム第1回が無事に開催できました。来年は愛媛へバトンタッチをいたしました。本当にありがとうございました。

① 浦和ひなどり保育園

園長
丸山 和彦氏



発表資料▲



どんぐり山の自然体験

【取り組みの背景】

浦和ひなどり保育園は、埼玉県さいたま市の桜区で昭和13年に農繁託児所としてお寺が開園した歴史のある保育園です。平成15年頃から3代目の園長が就任した際に、時代の変化と共に子ども達の成育環境が激変していることを受け、他園の見学などを通して理念や保育方針を見直し始めました。その一環として平成18年に、隣接する医王寺の裏山、通称「どんぐり山」を保育に活用できないかと検討を開始します。

東京のベットタウンとして、都市化が進むさいたま市では、中心部からは少し外れた当園の立地でも宅地化が進み、森林などは勿論、田や畑といった空間も年々姿を消し、子どもが日常的にアクセスできる自然環境が年々貧しくなっている実感がありました。当時、「外遊びで土の上に寝転ぶと、服が汚れるから嫌だ!」「虫は気持ち悪いから嫌い!」「(少しの活動で)疲れたー疲れたー」といった子ども達の声を耳にし、自身の幼児期の経験と照らし合わせても、驚きと共に乳幼児期の経験や体験が、数十年というスパンで急激に変化してきていることを日々の保育を通して実感をしていました。そこで、社寺林として長年人の手が入らず、木々や竹林がうっそうと生い茂っていたどんぐり山に着目し、「地域の自然を再生しながら、子ども達が主体性を持って、安全に遊べる場所を作ろう!」と当園が中心となってどんぐり山の整備計画を開始した次第です。

【整備活動の概要】

平成19年に社寺林「どんぐり山」の竹林で、子どもが出来るだけ安全に遊ぶことが出来るように、また地域の自然を守るために外来種をできるだけ植えない、といった2点に注意しながら埼玉県生態系保護協会のご協力のもと、ビオトープ管理士の資格もった造園業者に整備を外注しました。その際に、資金面では三菱東京UFJ銀行、隣接する医王寺から寄付を頂き非常に助かりました。

園の職員は日常の保育でただでさえ多忙なため、あまり無理をせず毎年小さな目標をたてスモールステップで整備を進めていきました。現在では年3回程度、父母会からの寄付で、造園業者に手入れをお願いしたり、職員では委員を決め随時整備活動を行っています。また職員、保護者で協力して竹の伐採や遊具等を整備するワークショップを年2回開催しています。

【保育がどう変わったか】

現在では園の0歳児(年度後半)から6歳児の園児がほぼ毎日遊びに入り、山からは子ども達の遊び声や笑い声がこだましています。自然の中での自由な遊びの体験、畑作りなどの当番活動や制作活動など、子どもたちが主体的に関わる数多くの実体験を通して、子どもも大人も様々な教訓を学んでいます。特に自然体験を通して園の文化として下記の3点が根付いてきたことがとても大きな成果だと感じています。

- ポジティブな人間観、子ども観、信頼感
・子どもに任せる、見守る姿勢
- DIYの精神
・自分たちでやってみよう、作ってみよう
- 心の安定
・コロナ禍で厳しい時でも、山での子どもの笑い声が癒してくれる

《園紹介》

社会福祉法人ひなどり保育園

浦和ひなどり保育園

住所：さいたま市桜区西堀2-6-26

最寄り駅：埼京線「中浦和駅」徒歩7分

《園の理念》

- ・「生かせ命」誰もが自分らしさを発揮できる場所作り
- ・「やってみよう!」<自己実現と成長>
- ・「ありがとう!」<つながりと感謝>
- ・「あなたらしく!」<独立とマイペース>
- ・「何とかなる!」<前向きと楽観>
- ・「ほどほどに!」<諦観と折り合い>

《園の方針・特色》

- ・子ども主体の見守る保育
- ・良好な人間関係・柔軟な試行錯誤
- ・豊かな保育環境

《園児数》定員150名 職員数：約37名

② 上田女子短期大学附属幼稚園

園長

新增 由香氏



発表資料▲



やまんばの森づくり プロジェクト

【取り組みの背景】

本園は、以前から裏山の自然環境を教育の中に取り入れてきましたが、踏圧による裸地化や水路の出現、樹木の生長の妨げ等がみられるようになったことや、園児の遊びの幅を広げるため、活動エリアの拡張を必要としていました。しかし、整備するには、人員の確保や整備知識の習得、土地所有者の確認等、課題も多と感じていました。

そのような時、令和4年度「自然保育」園庭・裏山整備・活用モデル事業（（公財）長野県緑の基金）のお話をいただき、『やまんばの森づくりプロジェクト』が発足しました。

【整備活動へのプロセス】

専門家（※）や関係者と連携し、具体的な整備のプロセスを作成していくために、裏山の未整備エリアに入り現状を専門的な視点から確認しました。散策した時に感じた「ワクワク感」や、地域住民の話から得た「昔の里山が持つ意味」は、この事業を計画する上で重要なものとなり、整備する側（学生・園児・保護者）の主体性を引き出すための軸となりました。

一つ目のプロセスとして、学生と園児とで未整備エリアの探検に組み込み、昔の地域の人々の生活や遊びの場であったことや、動植物との共存の場であることを学ぶ機会となり、その場所に親しみあそび場にしたい気持ちを掻き立てることに繋がりました。

二つ目のプロセスとして、参観日を利用して保護者にも伝える機会を組み込み、園児が探検を通して感じたことを伝えることで、保護者の整備活動参加への動機付けとなりました。

※連携した専門家

・事業全体のプランニング：木俣 知大（（一社）東京芸大Explayground推進機構研究員／日本自然保育学会理事）

・森林整備・森あそび・安全管理の専門家：加々美 貴代氏（NPO法人やまぼうし自然学校 代表理事）

【整備活動の内容】

11月から3月までの間、短大の授業と連携した活動を1回と、休日の親子プログラムとしての活動を3回実施しました。整備の専門知識をもつNPOやまぼうし自然学校スタッフの皆様にご指導いただきながら、道具の使い方やリスクマネジメントを学び、学生・園児・保護者が協力して不要な樹木の伐採・遊歩道整地・枝木の剪定等を行いました。休日のプログラムは整備の他にも、自然遊び体験・森あそび（ロープワーク）・森林セラピーなどのプログラムを入れることで参加意欲を高められるよう計画したことで、異年齢の子ども達・保護者・スタッフの「たて・よこ・ななめ」のかかわりが生まれ、「やまんばの森」は「コミュニティの場」となりました。また、参加者が主体的に活動できる場となることで、保護者がプロジェクトの運営にもかかわる体制の基礎を作ることができました。

【考察】

森林整備を体験したことで園児は森への愛着が深まり、「与えられていた環境」から「自ら関わる環境」へと意識が変化し、保護者は整備活動を通して自然保育への興味や関心を深めることができました。今後も「やまんばの森づくりプロジェクト」を継続し、園児のあそび場の拡張やそのための整備のノウハウを学ぶという目的だけでなく、主体的に自然とかかわることの喜びを共有しながら、地域のコミュニティの場としての役割を見出していきたいと考えます。

《園紹介》

本園は長野県上田市に位置し、開園当初（昭和53年）から幼稚園の園舎裏にある「唐白山」という里山の自然環境を活かした「自然保育」を行っています。平成27年度「信州やまほいく（信州型自然保育）認定制度」の普及型認定園として認定されました。隣接する上田女子短期大学の教員や学生と様々な連携や協力体制のもと、自然豊かな環境を活かし教育目標である「健康な子ども」「心の豊かな子ども」「生き生きしている子ども」を育てています。

③ 認定こども園さざなみの森

理事長

難波 元實氏



発表資料▲



こどもの里山（森）づくり 45年とこれから

【取り組みの背景】

1979年に東広島市という地方都市のそれも中心市街地から離れたところに、幼稚園を設立しました。子どもたちの原風景として記憶に残る自然豊かな里山を選び、農家の裏山を園地としたのです。起伏のある自然地形で、子どもたちがおもいっきり遊び、危険回避能力を発揮しながら生き生きと駆け巡る環境づくりを目指したのです。

それから約30年後の2010年頃には、まちの変化とともに園児数も増え、共働き家庭の増加による長時間保育のニーズが高まります。子どもたちの現状を把握しようと、遊びの三要素（時間・空間・仲間）でアンケートをとってみると、幼稚園から帰って「遊び場がない、遊び仲間が広がらない」ということが明らかになります。そこで、幼稚園機能、保育園機能そして子育て支援機能をもつ認定こども園に2011年移行することにしたのです。

そこで、長時間保育の内容を如何に充実させるかが私たちの課題となったのです。いままでは眺めるだけだった園周辺環境の里山を、「どのように活用するか？」という課題が明らかになったのです。

【整備活動の概要】

地域の方々の協力を得てこの里山で、一年間のお米づくりの体験、野菜づくりの体験、ため池から流れる用水路の水遊びを始めます。春には田植えの後のオタマジャクシやカエルを捕まえ、夏にはバッタやトンボを捕まえ、秋には案山子を建て、稲刈りや脱穀を体験し、冬にはこの地域特有の収穫を祝う「亥の子」や無病息災を祈る「とんど」など、廃れかけていた地域の伝統行事を復活させることになったのです。子どもたちをまんなかに地域の方々、保護者の方々そして園のスタッフが協働して、みんなで里山整備活動を始めることになったのです。

もう一つ、地域の農家の方にとってやっかいな裏山の竹林の整備を保護者や園スタッフが定期的に行い整備された里山で日常的に遊ばせていただけることになったのです。

地域と園とのwin-winの関係づくりができたのです。そのことによって、里山の自然木を100本ちかく切り出し、園庭に自然木のジャングルジム（森のラビリンス）を組み立てたりもしています。また、園や保護者ができたお米や農作物を購入させていただくことによって、地域を元気にする地域支援型農業を推進しています。子どもたちにとっては、日常的な里山遊びで五感をひらき、生きる力の基本を育てているように思います。

しかし最近では、この地域でも農業の担い手不足で耕作放棄地がでており、人手不足で里山の荒廃が進み、都市化による住宅地開発が迫り、資材置場や太陽光パネルの設置などにより田畑が転用されるなど里山環境の維持が危機に瀕しています。最近では、「里山を子どもたちの遊びの場に、原体験の場にと、関わるみんなで守ろう、創ろう」と呼びかけています。

【保育がどう変わったか】

里山へ日常的に行き来するようになり、農的活動を子どもたちと一緒にするようになると、みんな安全確保のために監視しなくてはという視点から、こどもの興味関心に寄り添うようにだんだんとなりました。そして、スタッフや保護者の空気が不思議とやさしく見守る雰囲気が出たのです。

《園紹介》

45年前の1979年に私たちは、自然とともに生活する子どもたちの環境をつくりたいと、この里山の斜面地を園地としました。

そこには、農家、田んぼ、畑、小川、ため池、神社など、日本の田園風景が残っています。その自然に囲まれた環境の中での活動や遊びが、子どもたちの心の原風景になればと願っています。自然の中で、見て、聴いて、触れて、匂って、味わう・五感をひらいて遊ぶ子どもたちの姿を大切にしています。子どもたちが自然のなかで感覚を磨き、みずから育とうとすることが生きていく力につながると信じています。

④ 伊那市立高遠第2・第3保育園

園長

下島 直美氏



発表資料▲



子どもを中心に、園と地域と保護者と手をとって…

【取り組みの背景】

「高遠第2・第3保育園」は長野県が推進する信州型自然保育認定制度の「特化型」に公立園では唯一認定されています。この地に50年、地域の方のご厚意で自由に遊ばせていただいております。

平成27年当時、園児が18名まで落ち込み、園の存続が危ぶまれた時、地域・保護者などで「高遠第2・第3保育園と地域の未来を考える会」が立ち上がりました。会員の努力や、自然保育の取り組みを様々な所で取り上げてもらったことが功を奏し、移住が徐々に増えていきます。現在33名の園児の内9割が移住のお子さんです。保護者は「自然豊かな所で暮らしたい」「子どもにこんな保育を受けさせたい」と思って移住を決め、「やまほいく」にもご理解をいただき日々の保育を支えていただいております。

過疎化の進む地域ですが子どもたちの笑顔や声が響き渡ることによって地域の活性化の一翼を担っていると思っています。

【整備活動】

私たちの保育を支えてくれているのは、地域や保護者ばかりではありません。

平成30年に普及型から、特化型へ認定を受けなおしたのを機会に「長野県自然保育活動フィールド整備事業」により助成をしていただきました。普段遊ぶ「ねじねじのもり」、所有者の許可をとり、枯れ木、倒木の除去などをしていただきました。実際に作業に従事した方からは「何年か先の山の様子を描きながら作業した」とお聞きしています。山の中にはいくら気を付けていても危険があります。この整備により、何か起こってしまった時のリスクを小さくすることができたと考えます。また、子どもたちの姿から、山の中の環境を考えた時、「作りこみすぎない」ということも大切ではないかと考えています。

現在は保護者会などにより、倒木の危険のある木を撤去してもらうなど定期的に手を入れていただいております。

【保育について】

私たちは、「やまほいく」を通して、伊那市の保育目標である「生きる力のある子ども」を育んでいます。

四季折々の自然の中で、山の生き物の生活の場で遊ばせてもらいます。山の中で、木の枝や石はごちそうになったり無線機になったり、剣になったり、丸太が一本あれば、竜にまたがって空高く飛んだり、海賊船になって遠い外国まで旅したりします。子どもの創造の力は無限です。

そして自分でやりたいことを、自分で決めます。ターザンロープもやる、やらないは自分で決めます。その瞬間の全てを、両の腕にかけて飛び立ちます。今の自分の力がどのくらいなのかを知り、自分にできないことができる友達の存在、勇気を出そうとしているあの子の存在、ともに認め合って育っていきます。「自然は大きな先生」当園の保育士の共通の思いです。

《園紹介》

南アルプスと伊那山地にはさまれた山間の地、伊那市高遠町。江戸時代には高遠藩の城下町として栄え、今も高遠城址公園は観光客でにぎわいます。この地に立つ高遠第2・第3保育園は昭和46年に「第2保育園」として開園し昭和60年に園児の減少で休園となった「第3保育園」と合併し現在の形となりました。山々に囲まれた自然の中で、1歳から5歳までの子どもたちが約30名、のびのびと育っています。

当園は長野県が推進する信州型自然保育認定制度、通称やまほいくの「特化型」に公立園では唯一認定されています。園の裏山「ねじねじの森」に毎日のように出かけ、伊那市の保育目標「生きる力のある子ども」を育んでいます。

NPO・地域組織・行政・保護者等との連携で広がる 「こどもの森づくり」

<全体進行> 秋草学園短期大学
幼見教育学科 准教授
北澤 明子氏

分科会Ⅰでは、NPO・地域組織・行政・保護者等との連携で広がる「こどもの森づくり」というテーマで、実際にこどもの森づくりを行っている4園の先生方（浦和ひなどり保育園 丸山先生、上田女子短期大学付属幼稚園 新增先生、認定こども園さざなみの森 難波先生、伊那市高遠第2・第3保育園 下島先生）に事例発表をしていただき、その後、登壇者とともにこどもの森づくりについて深めていくためのディスカッションを行いました。

ディスカッションでは、まず発表してくださったそれぞれの園で、子どもにとって、「森」はどのような場所かという質問を進行者から行いました。それに対して先生方からは、「森」は、変化があり素材が豊富で、偶然との出会いがある場所であるということ、そのような場所のため、センス・オブ・ワンダーを感じることができ、豊かな遊びを作り出すことができる場であること、非日常ではなく、生活（園舎）とつながっている場であることが語られました。

次に、各園で「森」を保育実践のフィールドとして整備していった事例発表から、近隣の森、近所の森＝こどもの森ではないということを感じたということを経験者から話をし、近隣の森、近所の森がぼくたち、私たちの森（こどもの森）になるためにはどのようなことが必要だと思えるかという質問をさせていただきました。その質問に対して、先生方からは、積極的な連携をしていくこと、そのプロセスのなかでたくさんの人をまきこんでいくことや、企画の段階から子どもと一緒に作り上げていくことの大切さが語られました。

次に、様々な方との“連携”ということが本分科会でのキーワードでもあったため、連携をすることで新たに見えてきたことはあるかという質問をさせていただきました。先生方からは、連携しないとわからないことがあり、やってみて園としてどうしていきたいのかという想いを大事にしながら、連携をしていくことが大切であることや、連携する前は、子どもの遊びがいかにか多様になるか、広がるかという視点で自然をみていたが、木が疲れているという話を聞いてそういう視点があるのかと感じ、生態系という新たな視点を得たというお話をいただきました。更に、土地の所有者のところに子どもと一緒に挨拶に行くなどの連携も大事にしているなど具体的な方法についてもお話がありました。

また、長野県では認定制度があり、自然保育の認定を受けなかったら繋がらなかった方と繋がるきっかけになっているという制度創設からの連携についての話が出たため、認定、認証園として実際にされている3園の先生方に制度創設による影響や変化についてお聞きしました。先生方からは、制度ができたことで、地域の方の自然保育への理解が深まった部分があること、移住促進という目的もあってはじまった制度であったが、ブランディングという意味でよかったということ、実際に整備事業を行い、認定園としてのアプローチを行うことで移住者がきてくれたなどの制度創設による効果が語られました。

一方で、自然フィールド整備の助成もあるが、まだ使えておらず、今後活用しやすい制度設計も考えてもらえるとういのではないかと制度に関する課題についても語られました。

最後に、ディスカッションを踏まえ、司会から森は一度整備しておしまいでなく、整備をし続けていくことが必要であり、子どもとともに森を地域のなかでつくり続けていくことが必要であることが共有されました。以上のように、ディスカッションでは「こどもの森づくり」を進める意義やそのための留意点、課題、展望について参加者の方と共有することができました。ご登壇いただいた先生方、ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。



① 岐阜県立森林文化アカデミー

教授

萩原・ナバ・裕作氏



発表資料▲



「近くの森で遊びましょ！」 ～近所の森が遊び場になるまで～

「昔のように山の中を毎日のように駆けずりまわる、そんな保育がもう一度したいんです。」園長先生のこんなアツい一言から、この活動が始まりました。10年以上も前のことです。

「近くにいい森ないですか？バスで行くような遠くの森じゃなくて、歩いていけるような、近くの森がいいんです。見つかったらまずは子どもたちと一緒に遊びにいきましょう。」私はそう応えました。

そしたら園長先生が、さっそく地域の人に掛け合って近所の森を見つけてきてくれました。さあ、子どもたちと一緒に森遊びの始まりです。森を遊び場に変えていくのは子どもたち。私たち大人はそれをそっと見守ります。しいて言えば、危険箇所（落枝や枯木、崖崩れや落石、罨などがないかなど）のチェックをしたり、子どもたちと一緒に真剣に森の中で遊ぶことくらいかな。そしたら何が起きたかって？そりゃもう色々です。そのいくつかを紹介すると


- * 子どもたちが今まで見たことないような顔で遊び始めたこと。
- * 園内では見られない関係性や意外な行動が見られるようになったこと。
- * 保育士さんの子どもの「遊び」に対する意識が変わったこと。
- * 保育士さんの関わり方が変わったこと。
「危ないからダメ」というような言葉が少なくなったり、過度な介入がなくなったりと子どもたちの遊びや活動を見守るようになってきたこと。
- * お父さんお母さんとの親子会で森遊びが始まり森遊びへの理解が深まったこと。
そしてそれによって子どもたちがなぜ森で遊ぶのか、なぜ服が汚れたり破れたり怪我したりして帰ってくるのか、など活動の意味を体感をとおして理解してもらえたこと。
- * 森遊びにお父さんやお母さんお手伝いに来てくれるようになったこと。
- * 子どもたちと一緒に遊びながら森の整備が始まったこと。

- * 地域の山主さんが喜んでくれたこと。
- * 先生たちが森のことを知りたくなって、森の知識や遊び、森の管理についてなど、いろんな講座に参加を始めたこと。
- * この活動が他の市町村にも広がっていったこと。
- * 先生たちによる自主学習グループが発足したこと。
- * こうしたことが園の文化になってきたこと。
- * これをきっかけに公立園から保育士さんが森林文化アカデミーに学びに来て、卒業後に「里山保育士」として公立園に戻って活動を始めたこと。

などなど。。なんだか森ってすごい力があるんですね。こうした、これまでの活動の中で感じたポイントをまとめると

近所の森を遊び場にしていくためのポイント

- ・何よりも情熱
- ・遠くの大きな森より近くの小さな森
- ・子どもとの関わり方が大切！
- ・自分たちの手で
- ・少しずつ 気づきや学びを深めながら
- ・保護者や地域と一緒に
- ・リスクマネジメントを忘れずに
- ・仲間・リソースを活用
- ・楽しく！



といったところです。さあ、子どもたちと一緒に森に遊びにいきませんか？

《園紹介》

この話の舞台となったのは美濃加茂市立「ほくぶ保育園」ですが、この活動をきっかけに同市立「山之上子ども園」、そして隣町の関市の公立保育園へと活動が広がっています。関市では「チーム森」と言われる自主活動が誕生。また令和4年度(2022年度)からは、森のようちえん、公立園、私立園など、市町村や運営スタイルを超え、各園のフィールドで子供たちと共に森で遊びながら交流研修をする「現地交流研修」が定期的に始まっています。

③ 都留市宝の山ふれあいの里
ネイチャーセンター
佐藤 洋氏



発表資料①▲



発表資料②▲



ほいくとくらし
森を知ることからはじまった軌跡

【取り組みの背景】

2010年に生態系というものを目の当たりにする事件が起きます。ニホンザルに園児が襲われたのです。これらの事象をきっかけに生態系の中に保育がはいる時期を迎えます。

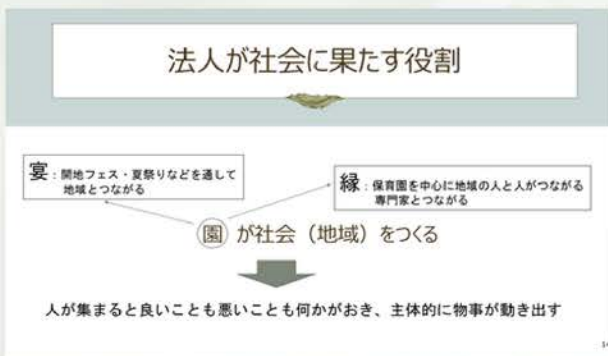
【活動内容】

2014年から都留市、都留文科大学、南都留森林組合、製材所、地主、保育士などで構成された森の整備委員会を発足しました。その後、2023年まで園児と作り上げる森の保育や専門家とのイベント、保護者、園児、専門家、地域を巻き込むカタチに変化していきました。

コロナ禍においては、園内だけでなく公共施設を活用した週1回、保育と暮らしをテーマにした、コドモが社会のなかで役割を担う暮らしの活動を年間活動として展開しています。

であるからこそ、保育者が自ら考え、コドモだけでなく、養育者や地域、森、林、植物、樹木、動物、微生物のことに好奇心を抱き、主体性を持ちながらなお客体的に事象を捉え、コドモたちや養育者、生態系と対話を通じ、プロセスを楽しみ、苦しみ、地球を捉える眼力を養っているのです。そのカタチとして、仮説検証型変態部や永遠の登山サークル、映像部、なんかおもしろい部などが続々と立ち上がり、保育のみならず、保育が暮らしへと変遷していっています。

2023年11月現在、社会福祉法人が社会に果たす役割のひとつとして、人が園に集まると良いことも悪いことも起き、主体的に物事が動き出す取り組みを展開しはじめました。ラジオ体操同好会となります。保育園を中心に地域の人と人がつながる専門家とつながる事が縁つなぎの活動のひとつです。その先にもフェスや夏祭りなどの宴を通じて、社会づくりとなるコモンズ活動を展開しています。



【活動の思い・どう変わったか】

主体はもちろん子どもです。そして生態系でもあるのです。人間は生態系の中にいるべきですが、主体にとらわれるあまり客体を見失います。今を生きる子どもたちが生きるために本当の必要な力を身に着け、しなやかに育ち、豊かに生きていくにはオトナの固定概念を見直さなくてはなりません。問いに対する答えを直線的に捉えるのではなく、そこまでの紆余曲折したプロセスを楽しめるオトナがたくさんいたのなら、コドモたちの育ちは幸せであり、豊かです。

オトナも同様であると考えています。

《園紹介》

- 山梨県都留市 社会福祉法人真正会
幼保連携型認定こども園 開地保育園
- ・山梨県東部地区の都留市に位置。森林比率75%
 - ・施設位置は都留市の東、市内中心部（市役所）から3km、車で5分。
 - ・設置主体は、社会福祉法人真正会。付帯施設として真福寺、デイサービスが隣接
 - ・園児数75名、職員数32名
 - ・ニホンシカの数は上昇傾向、虫の数は横這い、微生物は園庭の土壌改良により上昇

④ きまま工房・木楽里 き ら り

オーナー

井上 淳治氏



発表資料▲



人と森林、生活と木 ～子どもと森林、遊びと木～

【取り組みの背景】

●子ども森林学園

私が子どもたちと森林を結ぶ活動を始めたのは、森林クラブとの出会いがきっかけでした。森林クラブは、その当時全国に広まった森林ボランティア団体の草分け的団体で、群馬県下仁田町の国有林と分収契約を結んで森づくりを実践していた団体です。その活動の一環で、森林の手入れを子どもたちと一緒に体験しようと生まれたのが「子ども森林学園」。これに発足当初から関わっていました。

【活動内容】

夏休みに3泊4日から6泊7日の期間、下刈りや散策等森林を満喫します。子ども森林学園で大切にしていたのは、体験です。森林の手入れだけでなく森林の中にどっぷり浸かることで、教えるのではなく、何かを感じてもらいたいという思いで活動していました。この当時の仲間たちとは、その頃子どもだった人も含め今でも定期的に集まっています。

●スライド授業

地元西川林業地で活動する林業研究グループ、西川林業クラブでは地域の産業である林業を子どもたちに伝える授業を行っています。1991年から始めた活動で、自主製作したスライド（現在はDVD）を使い、飯能市内の小学3年生を対象に、全11校の小学校を会員が手分けをして回っているものです。今までに延べ2万人を超える子どもたちに西川林業の話をしてきました。子どもたちの反応もいいのですが、先生から好評で毎年恒例の事業になっています。

●森育・木育

現在、都市部にある6つの保育園・幼稚園と定期的に交流しています。そのうち4園はこちらに来て森林の中で遊んでいきます。春は植樹・山菜採り、夏は下刈り体験・川遊び、秋には間伐体験等、季節に合わせた体験をしています。

このような活動をするうえで一番の課題となっているのが、場所の確保です。特に作業体験では、アクセス、広さ、安全性を考慮すると対応できないことも多いのが現状です。

中でも植樹は定期的実施することは難しい活動です。場所の選定に加えてトイレの問題、蛇・蜂・ダニ等の対策が安全面からも重要で下見を欠かすことはできません。現地での活動は課題も多いのですが、その効果も果てしなく大きいと思っています。

現地に来るのにバスなどを利用することは、園にとってハードルの高い行事だと思います。そのためこちらから出向いて森林を感じてもらおう活動もしています。細い丸太を輪切りにしてコマをつくって遊んだり、ヒノキの細い角材に願い事を書いて鉋で削り七夕の短冊をつくったりしています。時には木を丸ごと一本持ち込んで、園庭でそれをパズルのようにつなぎ合わせ立木を再現することもあります。木の香り、さわり心地、時には樹液をなめてみて五感を通して感じてもらいます。森林をそのまま持つて行くことはできませんので、何をするにせよ森林と結びつけ身近に感じてもらうようにしています。

森林を健全な状態で維持し続けるには、それに関心を寄せる人を育てなければなりません。現地に来てもらうにせよ、こちらが出向くにせよ、人と森林・生活と木をいかに近づけるか、しかもそれを楽しく伝えられるかが重要だと思っています。

【プロフィール】

1960年生まれ。24才で家業の林業に従事する。1997年に地域材を活かした木工房「木楽里」を開設。2007年から木育に取り組む。2018年SGEC森林認証を取得（FM（森林管理）とCoC（加工流過程の管理））

④社会福祉法人あけぼの会あけぼの保育園

ウレシパモシリ 主宰
高橋 京子氏



発表資料▲



「子どもの心を動かす木育」 森を保育に持ち込み、保育を 森に持ちだす

【取り組みの背景】

～教えから出会いへ～

ウレシパモシリでは、自然の知識を教えるのではなく、如何に、多様な自然の姿や事象に出会わせてあげることが出来るかを大切に進めてきました。都会に住んでいると遠くの森までは日常的にはいけません。

しかし、多様性を持ち私たちの命を育む森の木を保育教育資源として捉えて、出来るだけその生の姿のまま日々の保育に持ち込み、日常の中で出会わせてあげること、子どもたちは、森の木に触れて馴染み親しみ、遊び込む程に森への憧れがうまれます。更に、保育のねらいを持って森に出かけてみると、子どもたちは本物の森と出会い心が動き、森となかよしになります。

【森を保育に持ち込む】

毎年春に、林業家の井上淳治氏の協力の元、森で間伐した丸ごと1本の木を、そのまま園庭に持ち込みます。切り分けた丸太や枝葉を、もう一度元の姿に再現する大きな木のパズル遊びにチャレンジ。丸太をどうつなぐのか、空に向かうほど細くなる？枝葉はどう付いている？並べたりつなぎなおしたりしていく中で、木の姿や形、匂い、手触りにもたっぷりと出会います。木のパズルが完成したら、並べた大きな木に添って年長児がみんな寝転び背比べ。友達何人分の背の高さになるかな。2階のテラスから、鳥になった気分その姿も互いに確かめました。木の皮を剥くとツルツルの木肌が出てきてみんなうっとり！舐めたら甘かった！

森から持ち込んだ貴重な保育資源。全部使って遊びこみます。葉っぱ、木の実、枝、木の皮等、同じパーツ毎に分類して仲間分け。その後の日々の保育に活かします。森の自然素材は、どれも同じものが無く、正解も優劣も無く、歪だからこそ、子どもたちの心を動かします。五感を通して集中して遊びこむ姿が生まれ、森へのイメージや憧れ、期待が膨らみます。

【保育を森に持ちだす 森遊び&きこり体験 in埼玉県飯能市木楽里】

秋には、森に出かけます。子どもたちは森にご挨拶をして入り、目を閉じて森を感じるころから始まります。今度は、自分達で昔ながらの木こり体験にチャレンジ！ロープ掛けから始まり、ノコギリとナタで1本の木を切り倒します。みんなで力を合わせてロープを引くと、木が倒れる瞬間に森に響き渡る音。ヒノキの香り。子どもたちのキラキラした達成感！

五感をフルに動かして生の森を全身で感じて遊んだ体験は、一生涯子どもたちの中に残るでしょう。

【保育がどう変わったか】

あけぼの会の園長先生方にお伺いました。

「子どもたちの感性が本当に豊かになっていきました。それによっていろんな世界に入り込めるようになり、日々の小さな変化に気づくようになりました。それは自然の変化だけではなく、お友だちや先生など人にも繋がっています。大人が気づかせるだけではなく、見る、感じることを子どもたち自身が、自分で見つけて伝えてくれるようにもなりました。知ることは感じることの半分も重要ではない。レイチェル・カーソンの言葉を子どもたちを通して本当の意味で感じる事ができています。」

社会福祉法人あけぼの会 長林美穂・上出大和

日々の生活と森、保育と林業家、多様につながりあう中で、互いに育ち合っていきましょう。

【自己紹介】

ウレシパモシリー保育と自然をつなぐ研究会－主宰 高橋京子

ウレシパモシリとは、アイヌ語で「互いに育ち合う大地」の意味です。豊かな子どもの育ちを応援したい思いを込めて、保育や子育てと自然をつなぐお手伝いを進めています。主に関東圏の保育現場に伺い、その園環境を見直し身近な自然を保育教育資源として捉えなおす提案や、乳幼児からの五感を通した身近な自然あそび実践や、保育と自然をつなぐ講演・保育指導者研修も進めています。

「こどもの森づくり」その意義、展望と課題

<全体進行> 東京農業大学 名誉教授
宮林 茂幸氏

分科会 II では、岐阜県立森林文化アカデミーの荻原・ナバ・裕作氏、山梨県都留市ネイチャーセンターの佐藤洋氏、きまま工房・木楽里オーナーの井上淳治氏、ウレシパモシリ主宰の高橋京子氏の四氏により、自然体験・野外教育にかかわる「こどもの森づくり」支援についての事例発表後、①子どもにとっての森の意義、②子どもが過ごす森の整備、③「こどもの森づくり」推進にあたっての課題や展望について、ディスカッションを行いました。



①子どもにとっての森の意義

森は子どもの活動にとってどのような意義があるのでしょうか？ 森は、極めて小さな微生物からクマなどの大型動物、巨大な樹木まで多様性に富み、全ての物質や生命が繋がって循環しています。どの生物にもそれぞれの役割があり、元々人間もその循環の中の一員として森と人とは「共生・共存」の関係がありました。また、森は凹凸・急緩傾斜・東西南北、様々な地質と環境があり多様性に富んでいます。森に生息する生き物がその環境に生きる理由があることを、森は教えてくれます。森は子どもたちにとって、人間が自然の生態系の一部であることを知り、生態系や生物の多様性を学ぶ教材の宝庫で、教室であるとともに、先生でもあるとお話がありました。次に、「こどもの森」の要件として、身近な森、離れた森、荒れている森、整備されている森でも、基本的にはどんな森でも利用することが可能であるとお話がありました。多少のリスクは注意を養うことにも繋がります。他にも、神社仏閣などに隣接する森や屋敷林など、様々な森を「こどもの森」として積極的に利用することについて議論がなされました。

②子どもが過ごす森の整備

清らかな水や豊かな緑は生きる源であり、原点です。森には様々な機能や役割があることから、森での子どもたちの体験活動は情操教育に優れ、個人・団体を問わず教育の場としてふさわしい場所と言えます。その上で、施設等の整備ありきではなく、大きな危険性は排除する必要はあるものの、なるべく森そのものを活用することが大切であるとお話がありました。そして、遊びは子ども達の自主性に委ねること、できれば子ども達の手による森の遊び場づくりがあってよいこと。また、子ども達に情熱と感動を与えることのできる森であることが遊び場としてふさわしく、それには指導者の力量も問われてくるとお話にあがりました。

その一方で、森は地域の仕事の場としての位置づけも大切です。事例発表にあった森は、木材生産や特用林産などに活用されています。「こどもの森」とともに、地域における森林整備も同時に理解することが必要で、そうした地域の生業や営みの伝承、木を使う文化、これまでの長いつながりの中で今の森が維持されていること、これらをふまえた今後の森づくりが必要ではないかという議論がなされました。

③「こどもの森づくり」推進にあたっての課題や展望

三つの話題が上がりました。一つ目は、指導者養成の課題です。森での体験活動においては、森の生態への知識や森での遊び方のほか、地域の人々と森との関係性を知った上での判断など、広く様々な視点が必要です。また、指導者から子どもへの一方通行型の指導ではなく、子どもの自主性や感性を引き出すような指導力も問われ、こうした人材の育成が課題となると議論がなされました。

二つ目は、森での活動を普及するための情報発信についてです。私たちの日常は、高度な情報社会と、飽和した物質社会（誰が、どのように生産したかではなく、ものの利便性を追求する）にあります。今後、Society5.0の時代を迎える中で、ますます自然や森とのかかわりが大切になると考えられます。幼児期からの森での体験活動が重要であるとともに、その普及にあたって、その活動効果について科学的なエビデンスが必要になってくるのではないかと議論があがりました。

三つ目は、子ども達が日常的あるいはウィークリーで森と触れ合えるような仕組みづくりの必要性と展望です。日常的に触れ合う機会を増やすためには、身近な神社仏閣の森、公園や屋敷林など日常的に活用できる場所が必要ですが、時には郊外の森などに「こどもの森」を整備して、常時入れるようにするといった展望についてお話がありました。最後に参加者から、「今日の議論を聞いて、これからの人材教育において『こどもの森づくり』の重要性を認識した」「企業として森づくりに参加するにはどうしたらよいか」という声をいただきました。まさに産官民が参加する国民的事業として「こどもの森づくり」を発展させていくこと、その必要性を皆で分かち合い、分科会を閉じました。

エクスカージョン

～こども園における園庭緑化・裏山等整備・苗木のスクールステイの先進事例視察～

【日 時】 2023年7月8日(土) 10:00～17:45

【視察先】 「浦和ひなどり保育園」(埼玉県さいたま市桜区西堀2丁目6番地26号)
「花の森こども園」(埼玉県秩父市下吉田字芦田7114-3)

【来場者数】 40名

【プログラム】 10:00 集合

視察I/浦和ひなどり保育園(概要紹介、園舎・どんぐり山視察、質疑応答)

12:00 移動・昼食

情報提供/埼玉県「苗木のスクールステイ」

15:00 視察II/花の森こども園(概要紹介、園舎・裏山視察、質疑応答・意見交換)

17:00 移動

17:45 西武線「西武秩父」駅 解散

エクスカージョンには、北は北海道、南は九州まで、熱意ある保育・幼児教育関係者、自然体験・野外教育関係者、教育機関教員・学生などが全国からご参加頂きました。

視察先は、埼玉県が全国植樹祭関連事業として取り組んでいる「苗木のスクールステイ」にも参画し、埼玉県内の都市部と農村部の「こどもの森づくり」の代表例として、「浦和ひなどり保育園」(さいたま市)と「花の森こども園」(秩父市)を視察しました。また、移動中には、埼玉県から「苗木のスクールステイ」の紹介を行いました。

視察先では、園長や保育者等のご案内のもと、地域の森林・林業や造園等の関係者や保護者等とも協働して整備を進めている裏山を視察するとともに、園舎内でも裏山の自然素材も活用しながら、子どもの主体性を育む保育環境の充実に向けた工夫が紹介され、熱心な意見交換が行われました。



森のプレーパーク

～出前型森林体験プログラム「morino de van」
がやってくる！～

小鹿野町

- 【日 時】 2023年7月8日(土) 10:00～16:00
【会 場】 「みどりの村」村の広場周辺（埼玉県秩父郡小鹿野町飯田853）
【指 導】 関戸 博樹氏（(特非)日本冒険遊び場づくり協会 代表理事）
萩原・ナバ・裕作氏（岐阜県立森林文化アカデミー 教授）
【来場者数】 134名

小鹿野町では、木と森と人間の良い関わりを体験し、自然環境を守ることの大切さを広く伝える取組を進めております。その一環として、遊びを守り、場を支える「プレーリーダー」を中心に、子ども達が自分の意思で自由にのびのびと過ごし自主性や冒険心を育むため、プレーパークを開催しております。

こどもの森づくりフォーラムサイドイベントでは「森のプレーパーク」と題し、みどりの村の自然環境を舞台に子どもたちの「いいこと思いついた！」という声が響き、木製スライダーや木挽き体験など、やってみたいことがたくさん実現する楽しい遊び場を作りました。当日は、冒険遊び場協会や、子どもの遊び場推進委員の皆様にご協力をいただき、大勢の方々に来場いただきました。

本イベントが、第75回全国植樹祭の2年前イベントとして盛大に開催された事に際し、国土緑化推進機構の皆様、またNPO法人子どもの森づくり推進ネットワークの皆様には厚く御礼申し上げます。

今後も秩父地域が一致団結して第75回全国植樹祭が盛大に開催されるよう、秩父地域の森林の魅力を発信し続けようと考えております。



木育ひろば

～秩父市産の「木育おもちゃ」で遊べる！～

秩父市

【日 時】 2023年7月9日(日) 10:00～15:00

【会 場】 「秩父宮記念市民会館」けやきフォーラム

【来場者数】 171名

秩父市では、「生涯木育」を合言葉に、さまざまなライフステージで木と触れ合うことで、木の大切さや木材の利活用の必要性について広く知ってもらう取り組みを進めています。その一環として、市に交付される森林環境譲与税を活用し、秩父産材等を使用した77種類の木製玩具や関係什器類を製作し、無料で貸し出す事業を実施しております。

今回「こどもの森づくりフォーラム」のサイドイベントでは、秩父市や埼玉県産材を使った様々な「木のおもちゃ」で遊べる「木育ひろば」を開設いたしました。当日は木育研修を受講したボランティアの方々にも係員としてご協力いただき、お子様を含め150名を超える大勢の方々に楽しんでいただきました。

令和7年春に秩父地域で開催される「第75回全国植樹祭」の2年前イベントとして行われた「こどもの森づくりフォーラム」ですが、秩父での初開催を企画いただきました国土緑化推進機構の皆様、またNPO法人子どもの森づくり推進ネットワークの皆様には厚く御礼申し上げます。

全国植樹祭は、この秩父地域の豊かな森林に触れ、親しみ、身近に感じてもらう絶好の機会でもありますので、地域の魅力発信を含め、秩父地域全体で盛り上げてまいりたいと存じますので、皆様には引き続きご協力の程よろしくお願い申し上げます。



パネル展示

【日 時】 2023年7月9日(日) 9:45~17:15

【会 場】 「秩父宮記念市民会館」1階ロビー

【展示団体】

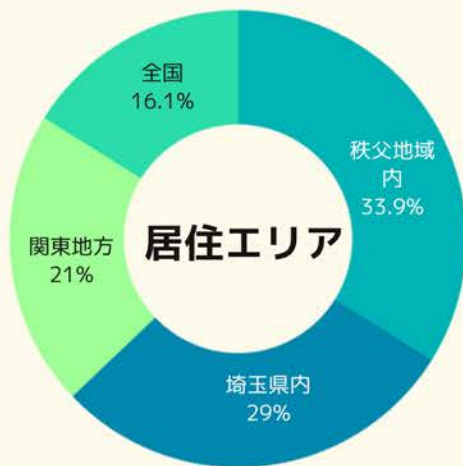
開催地	埼玉県、秩父市、小鹿野町
実行委員会	(公社) 国土緑化推進機構、(公社) 埼玉県緑化推進委員会 (公財) ニッセイ緑の財団、林野庁
協賛団体	(公財) イオン環境財団、積水ハウス(株)
次期開催県	愛媛県
関係団体	岐阜県立森林文化アカデミー

「こどもの森づくりフォーラム」に関わる多様な組織の森林・林業などに関する様々な取り組みを、幅広く来場者に紹介するため、パネル展示スペースを秩父宮記念市民会館エントランスに設定しました。

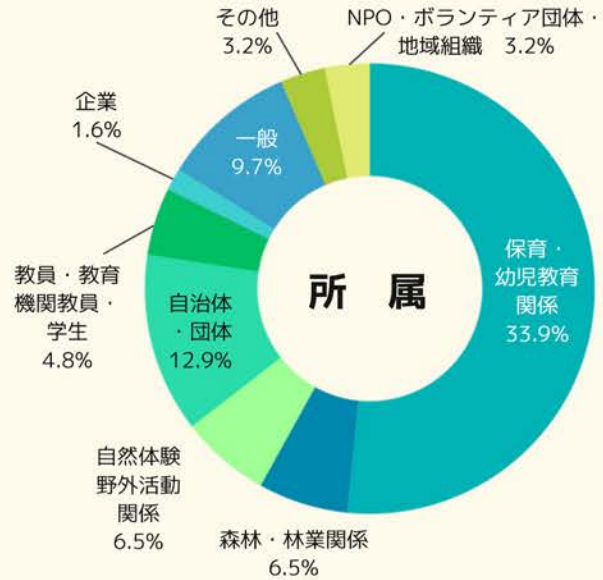
フォーラム当日は、延べ600名を超える多くの来場者の方々に、森林・林業や森林環境教育等について関心を深めていただく機会となりました。



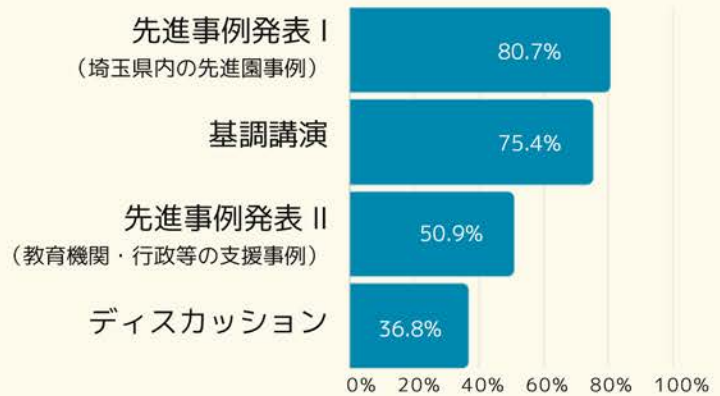
アンケート結果 (N=62)



補足：秩父地域内（秩父市・小鹿野町・横瀬町・皆野町・長瀬町）／関東地方（茨城県・栃木県・群馬県・千葉県・東京都・神奈川県）／全国（上記以外の地域）

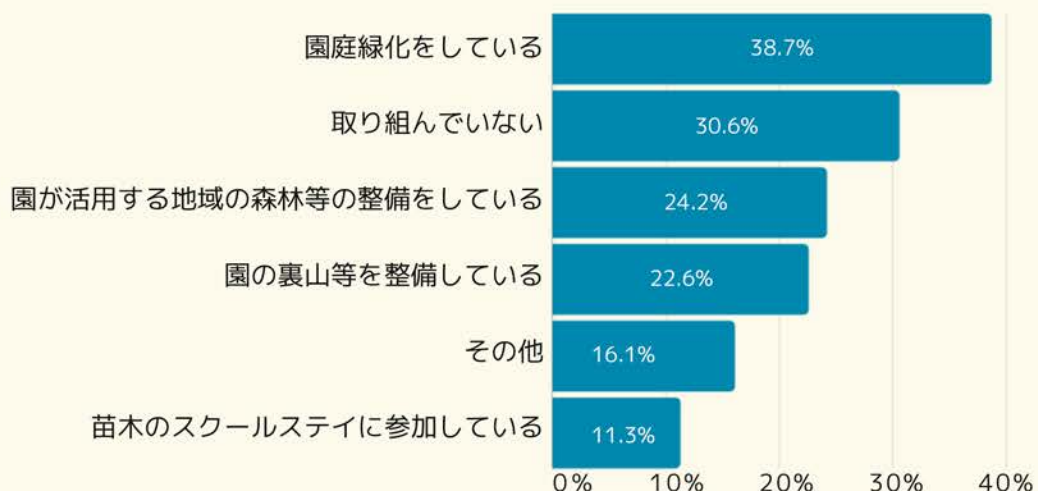


■どのプログラムに魅力を感じて参加されましたか 複数回答可（フォーラム参加者のみ N=57）

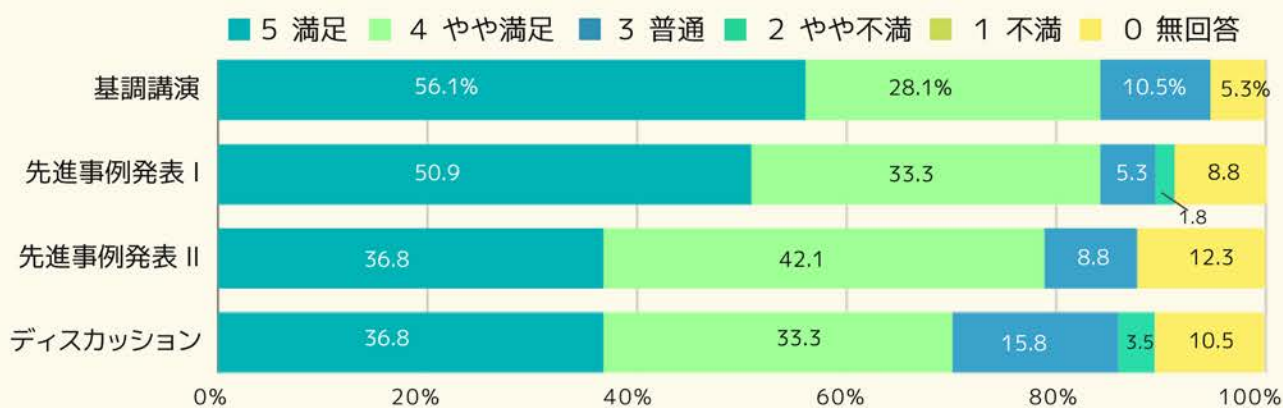


■「こどもの森づくり」の実践について

【質問】あなたや所属組織等では、保育所・幼稚園・認定こども園等での園庭緑化や裏山・地域の森林等の整備（こどもの森づくり）に取り組んでいますか。（複数回答可）

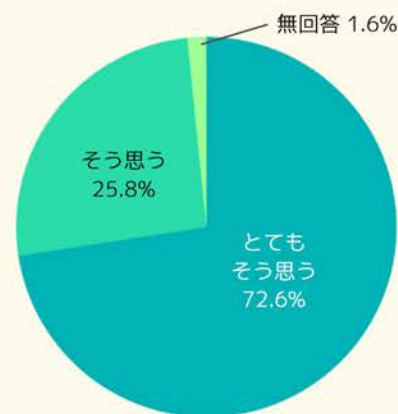


■各プログラムの満足度（フォーラム参加者のみ N=57）

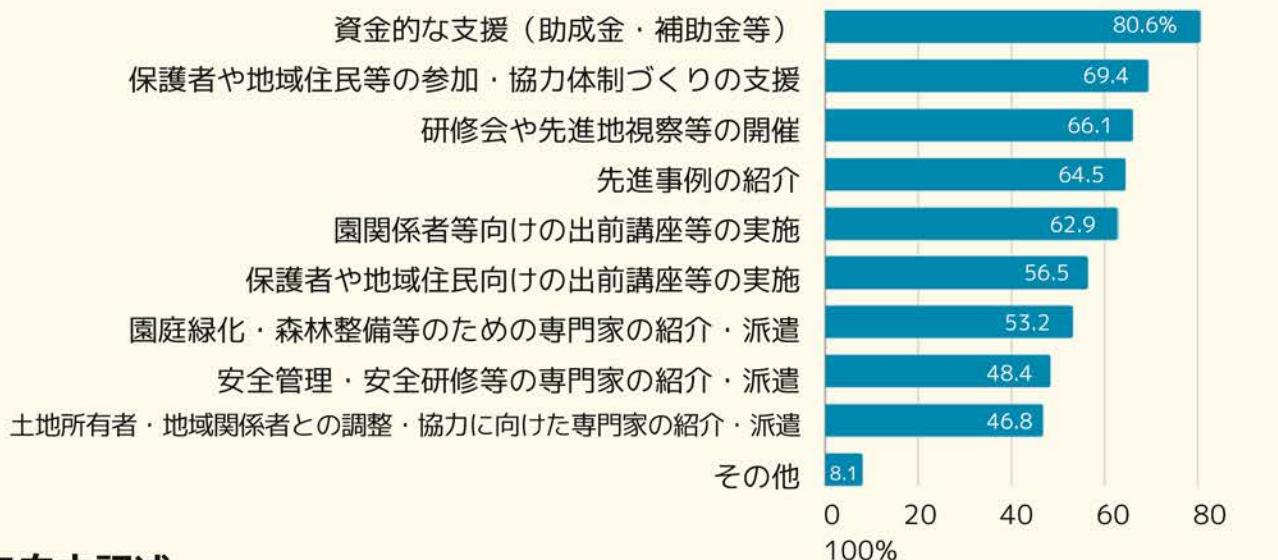


■こどもの森づくりの重要性

こどもの主体的な遊びを促す環境を充実させる観点で「こどもの森づくり」（園庭緑化や裏山・地域の森林等の整備）は重要だと思いますか。（N=62）



■今後「こどもの森づくり」を新たにはじめたり、拡げていく際に、どのような支援策があると良いと思いますか。（複数回答可）



■自由記述

基調講演、事例発表、ディスカッションともに、とても勉強になり刺激になりました。遠方から足を運んできた価値が十分ありました。今回のフォーラムの企画・内容・事例等は大変良いと思います。継続の開催を希望します。子どもにとって、森づくりの大切さや、森づくりを通じて、地域がつながっていくことをフォーラムで再認識しました。子どもだけではなく、保育者や保護者、参加者の笑顔も素敵で、子どもを大切に育てようという熱さと温かな雰囲気や確かな自信が伝わりました。事例発表から、子どももまた、自然保育の環境の作り手であり共働者であることを感じました。自園は自然豊かな環境ですが、あまり園庭緑化などを考えていないので、どうしたら興味を持ってもらえるかこれから考え、実践していきたいです。



イオン環境財団



公益財団法人イオン環境財団は「お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する」というイオンの基本理念のもと、岡田卓也（イオン株式会社名誉会長相談役）により日本で初めて地球環境をテーマにした企業単独の財団法人として、1990年に設立されました。

以来、多様なステークホルダーの皆さまとともに、「植樹」「環境活動助成」「環境教育」「パートナーシップ」の4つの事業を中心に、活動に取り組んでおります。今後は持続可能な地域の実現を目的に、新たな里山づくりにも取り組みます。

主な事業活動

植樹（イオンの森づくり）



東日本大震災の津波被災地への植樹

◆累計植樹本数 **1,265万本**イオン全体
自然災害や伐採などで失われた森林の再生を目指し、ボランティアの皆さまとともに植樹を行っています。(2023年11月末現在)

環境活動助成



助成先団体 里山環境さなざわ(さなざわり山だんだんの会)

◆累計助成団体 **3,333団体** / 累計助成金額 **30億2,961万円**
環境活動に積極的に取り組む非営利団体に対して、毎年総額1億円の公募助成を行っています。(2023年3月現在)

環境教育



AsianStudentsEnvironmentPlatform

環境活動に自ら取り組む人材の育成を目指して、さまざまな気づきや学びの場を提供しています。
◆**アジア学生交流環境フォーラム(ASEP)**
年1回アジア各国の大学生が集い、環境課題について討議するフォーラムを実施し、これまでに10カ国847名が参加しました。(2023年8月時点)

パートナーシップ



早稲田大学寄附講座 志賀高原ユネスコエコパーク里山研修

専門性をもつ多様なステークホルダーと連携して環境課題に取り組んでいます。
◆**日本ユネスコエコパークネットワーク**
生物多様性の保全や、持続可能な資源利用と発展の啓もうや環境教育に、共同で取り組んでいます。
◆**(一財)リモートセンシング技術センター(RESTEC)**
高度な技術を生かして、イオンの森づくりや環境教育に共同で取り組んでいます。
◆**日本ジオパークネットワーク**
地質遺産をはじめとする環境保全や、環境教育や防災教育に、連携して取り組んでいます。

顕彰



生物多様性の保全や持続可能な利活用、それらの普及・啓発・共有の推進を目的としたふたつの賞を創設し、生物多様性に関わる顕著な功績が認められる個人・団体を顕彰しています。

◆**イオン生物多様性みどり賞**

新たな里山づくりで提携

◆**早稲田大学**
2020年に共同で「AEONTOWAリサーチセンター」を設立
◆**東北大学**
2021年にイオンモール株式会社と3者で「イオン防災環境推進協働研究部門」を設立
◆**東京大学**
2022年に共同で「イオン東大里山ラボ」を設立
◆**京都大学**
2022年に共同で「新しい里山・里海共創プロジェクト」開始
◆**千葉大学**
2022年から「君津イオンの森」でフィールドとして同学大学院園芸学研究科によるランドスケーププロジェクトの演習の場として活用

早稲田大学



AEON TOWA リサーチセンター

2023年度 研究・活動成果報告

2024年 3月 18日(月) 10:15 ~ 16:00

早稲田大学 121号館 コマツ記念ホール

現地・ZOOMウェビナー・ハイブリッド開催
参加費無料・事前登録制

主催 早稲田大学環境総合研究センター
AEON TOWA リサーチセンター
共催 公益財団法人イオン環境財団
問い合わせ aeontowa@list.waseda.jp

報告とディスカッション

「本年度の取り組み報告」
「SATOYAMA についてのディスカッション」
などを予定

SATOYAMA フォーラム in WASEDA

～わたしたちは里山から何を学びとるのか～



<https://forms.gle/L3Tpl7TK5XGQzsW68>

こちらのQRコードから参加登録ができます。
感染状況によっては現地参加をお断りする場合があります。

写真: 君津イオンの森づくり イオン環境財団の植樹

公益財団法人イオン環境財団

〒261-8515 千葉市美浜区中瀬 1-5-1
TEL.043-212-6022 FAX.043-212-6815
E-mail ef@aeon.info <https://www.aeon.info/ef/>



ホームページ



Facebook



Instagram



木を植えています
未来の子どものために

Partner



積水ハウスの「5本の樹」計画とその取組

～生きものが暮らしやすい環境があれば、人々の暮らしも豊かになる～

■「5本の樹」計画と、期待される生物多様性保全の効果

積水ハウスは1960年の設立以来、累積250万戸以上の住宅を供給してきた日本最大規模の住宅メーカーであり、それだけ環境に及ぼす影響も大きいことから、早くから様々な環境への取り組みを進めてきました。都市部の生態系を回復させる「5本の樹」計画（以下、本計画）と名付けた造園緑化事業もその一つです。

「3本は鳥のために、2本は蝶のために、地域の在来樹種を」という想いを込めて、地域の気候風土や鳥・蝶などと相性の良い在来樹種を中心とした植栽による庭づくりを2001年から行っています。在来樹種を植えることで都市部周辺の自然と庭の生態系がつながり、生き物の生息域も広がり、生物多様性保全の効果が高まる事が期待されます。



■主な3つの取組

取組① 「庭木セレクトブック」などのツール整備

植栽を選ぶ際のカatalogとして「庭木セレクトブック」を作成し、本計画のコンセプトと、地域の在来樹種や生きものとの関係性などについてもわかりやすく記載しました。社内の樹木医が主体となり、社外の専門家にも協力いただきながら、気候や植物の適応性などにより日本を5地域に分類し、鳥や蝶との関係が確認できた114種類の在来樹種を選択しました。その後もバージョンアップを続け、今では288種に増やしています。これをお客様との外構計画の打合せで活用し、大変好評を頂いております。



今ではこれを電子データ化し、庭木に吊るしたオリジナルデザインの樹名札からお手入れの方法なども含めた情報が確認できるようにしています。

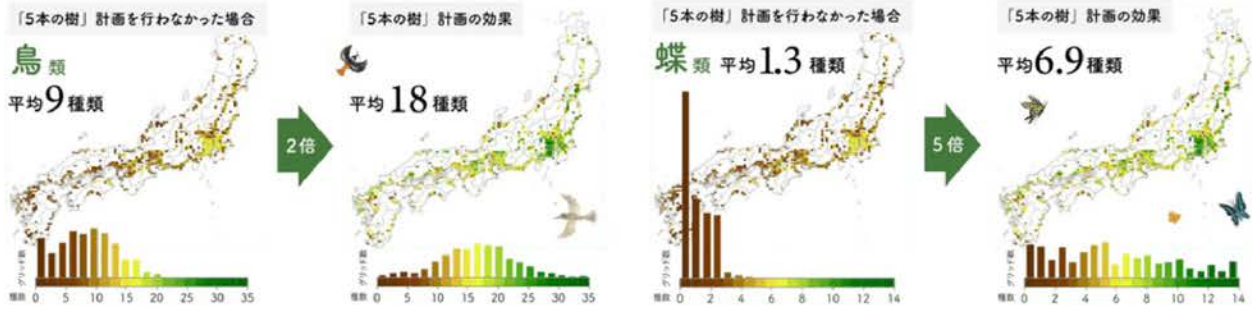
取組② 世界初の生物多様性保全の定量的な実効性評価

「ネイチャー・ポジティブ方法論」の確立

本計画の効果を検証するため、弊社の住宅団地において、専門家による生きもの調査を継続的にを行い、鳥や昆虫の種類や数が一般的な団地に比べて多いことを目視確認してきました。

ただし、この方法による効果確認は調査対象団地にとどまっており、本計画を実施した多くの点在する住宅による広範囲での生物多様性保全の実効性を確認することができませんでした。このため、実効性の効果検証を琉球大学久保田研究室と2021年に共同で実施しました。弊社がこれまで植えてきた20年分の植栽の実績データ（樹種、本数、位置）と、琉球大学のもつ日本全国の生物多様性に関するビックデータを重ね合わせて分析することで、全国での生物多様性の保全・再生にどれ程の効果があつたかを定量的に示すことが出来ました。

本計画を行った場合と行わなかった場合を比較した結果、住宅地に呼び込める可能性のある鳥の種類が2倍に、蝶の種類が5倍になることが分かりました。



取組③ オリジナルの環境教育プログラム「Dr.フォレストからの手紙」の提供

住まいづくりや造園・緑化事業を通じて培った研究成果を基に、次代を担う子供たちへの環境教育にも力を入れています。子どもたちが緑と生き物の関わりを理解し、自らの自然環境への関わりが地域や地球環境全体の保全につながることを考え、行動を促すプログラムを提供しています。

対象年齢は小学3年生～中学生で、理科・総合的な学習の時間を3時間程度使い、実施します。この学習の進め方をまとめた「ティーチャーズガイド」を配布しています。下記のお問い合わせフォームの「件名」を「ティーチャーズガイド希望」、「お問い合わせ内容」に「学校名/団体名」を明記して送信をお願いいたします。

お問い合わせフォーム：<https://www.sekisuihouse.co.jp/mail/form.html>



■今後の新たな取組

次のステップとして、東京大学曽我研究室と「生物多様性と健康」に関する共同研究を開始しています。今回の共同研究では、曽我研究室が構築した分析手法と、弊社の生物多様性保全の取り組みである「5本の樹」計画を組み合わせることで、「生物多様性の豊かな庭の緑」が「人の健康・幸せ」にどのような影響を与えるかということを検証します。

これにより、単なる「緑」ではなく生物多様性の豊かな緑が庭にあることの重要性を導き出します。都市部における身近な自然とのふれあいが、人の自然に対する態度・行動及びメンタルヘルスに及ぼす影響を検証し、社会に共有することで、都市部の生物多様性保全の更なる推進と、ネイチャー・ポジティブな社会の実現への貢献を目指します。

【プレスリリース】

https://www.sekisuihouse.co.jp/company/topics/topics_2022/20221130_2/

※一連の取組をHPにて公開しておりますので、是非ご覧ください。

（「5本の樹」で検索いただくか、右の二次元コードを読み取ってください）



第75回全国植樹祭埼玉県実行委員会



第75回

全国植樹祭

埼玉
2025

人・森・川 つなげ未来へ 彩の国

令和7年春季、秩父ミュージックパークで開催

全国植樹祭は豊かな国土の基盤である森林やみどりに対する国民的理解を深めるために開催される、国土緑化運動の中心的行事です。毎年春に天皇后陛下ご臨席のもと、式典行事や記念植樹を行います。埼玉県では、昭和34年(1959年)に金尾山(寄居町)で第10回大会を開催して以来66年ぶり2回目となります。



第10回大会での昭和天皇による植樹

開催理念

- ◆ 適切な森林の整備と森林資源の循環利用を推進し、森林の持つ多面的機能を持続的に発揮することで、森林・水・木材と私たちの暮らしや産業との結び付きを深め大切にしていきます。
- ◆ 豊かな川で繋がる山村と都市が、協力して森林・みどりを共有の財産として守り育て、元気な姿で未来の子供たちへ繋いでいきます。

▶ 第75回全国植樹祭式典会場(秩父ミュージックパーク)のイメージ



大会の基本方針

1. 全国植樹祭の開催を契機として、豊かなみどりを県民全体で次の世代に引き継ぐという機運を高めて、緑化運動と森林資源の循環利用を推進し、SDGsにも繋がる機会となる大会にします。
2. 埼玉県の豊かな自然や歴史・文化等の魅力を全国に向けて発信します。
3. 県民全体で「おもてなしの心」でお迎えし、全国植樹祭に参加される方の心に残るような大会となるよう努めます。



お問合せ

第75回全国植樹祭埼玉県実行委員会事務局
(埼玉県農林部全国植樹祭推進課内)

実行委員会ホームページ▲

電話 048-830-4306 FAX 048-830-4771

(公社) 埼玉県緑化推進委員会

緑を未来へつなぐ 「緑の募金」



令和5年 街頭募金

緑の募金は森林整備や身近な緑化活動への資金として活かされています。

また寄付を通じてSDGsの目標達成に貢献する取り組みです。



公益社団法人 埼玉県緑化推進委員会
さいたま市浦和区高砂3丁目12-9 農林会館B1
ホームページ <https://www.saitama-ryokusui.or.jp/>

秩父市



秩父の森・林業の情報サイト

ちちぶの森の「なっじん」活人



秩父地域森林林業活性化協議会

小鹿野町



全国植樹祭

小鹿野町公式ご当地キャラクター

おがニャッピ

岐阜県立森林文化アカデミー

岐阜県立森林文化アカデミー

森と人をつなぐ人材を2年間の超実践教育で育成！



<https://www.forest.ac.jp>

morinos (モリノス)

学内に、日本初の森林総合教育センターが誕生！



オフィシャルHP: morinos.net

⇨ モリノスの活動の様子が分かる動画が満載！

住所: 〒501-3714 岐阜県美濃市曾代88

一般財団法人 日本森林林業振興会



【<http://www.center-green.or.jp/>】

山火事予防ポスター用原画及び標語の募集・表彰(写真左上)や植林・保育林業体験活動、森林教室・自然観察会等の活動(写真右上)などを行うとともに、森林調査、地上レーザスキャナ・ドローン空撮を用いた新たな調査手法の実証(写真中下・右下)、シスイエースをはじめとする森林・林業資材の販売活動(写真左下)等を通じて、森林・林業の振興に取り組んでいます。

一般社団法人 東京林業土木協会



一般社団法人
東京林業土木協会

会長 小野 徹

公益財団法人 ニッセイ緑の財団

全国の学校関係者の皆様
学校の木のしおり・樹木名プレート
活用してみませんか？

ニッセイ緑の財団は全国200カ所のニッセイの森での樹木づくりを行っています。最近自然に目を向ける活動の一環として、各学校より学校の「学校の木のしおり」と「ニッセイの森」の樹木名を使用した「樹木名プレート」を提供します！

学校の木のしおり お申込みはコチラ

- 学校にある樹木の中から8樹種を選定いただき学校オリジナルのしおりを作成・送付致します。
- 樹木の写真や解説は、当財団が無料で提供させていただきます！(全校児童・生徒分の送付が可能です！)
- 学校の身近な樹木に触れることで、より学校も自然も好きになること間違いなしです！

樹木名プレート

- ニッセイの森の腐伐材を使用したプレートを無料で提供させていただきます！
- 自分で作成した樹木名プレートを設置することで、身近な自然への関心や探究的な学習意欲を育むことができます。
- 「理科」や「総合的な学習」、「生活科」等の様々な場面で活用できます。

ニッセイの森 全国約200カ所
植樹本数 約138万本

公益財団法人ニッセイ緑の財団
〒106-0001 東京都港区虎ノ門1-21-17 虎ノ門ビル4階
☎ 電話番号 03-3501-9203
☎ FAX 03-3501-5713
✉ info@nissey-midori.jp
〒アドレス

QRコード: 学校ホームページ, Facebook, Instagram

森林^{もり}を守る^{まも}
森林^{もり}を活かす^い

緑の募金

原画：根本由愛さん


ご協力を
お願いいたします

「緑の募金」は、身近な地域の森づくりをはじめ、国内外の森づくりや人づくりなどに大切に活用されています。



春の新緑シーズン(1月~5月)と秋の紅葉シーズン(9月~10月)の年2回
家庭募金、街頭募金、職場募金、企業募金、学校募金などによって行われています。

緑の募金に関するお問い合わせはこちらまで

公益社団法人 国土緑化推進機構 ☎ 0120-110-381
ホームページ <https://www.green.or.jp> 電子メールアドレス bokin@green.or.jp



林 野 庁

「遊々の森」とは

遊々の森は、学校等と森林管理署が協定を結び、学校等がさまざまな体験活動や学習活動を行うフィールドとして国有林を継続的に利用していただく制度です。

森林教室や林業体験などを通じ、子供たちの人格形成や幅広い知識の習得を行う森林環境教育の場として活用されています。（2023年3月末現在、146カ所）

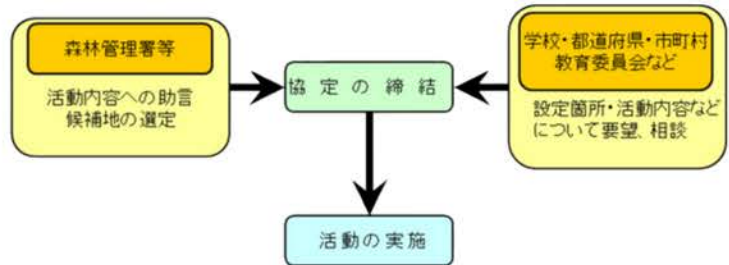
「遊々の森」活動の流れ

○遊々の森を活用いただける団体

学校、都道府県、市町村、教育委員会、学校法人など

○活用いただく場合の手続き

森林管理署長との間で、安全確保などの措置や費用負担、有効期限などの取り決めを含めた協定を締結します。



森林教室



ネイチャーゲーム



林業体験

お問い合わせ先

林野庁 国有林野総合利用推進室

03-6744-2323 http://www.rinya.maff.go.jp/j/kokuyu_rinya/index.html

NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク

～樹を植えて、子どもの心を育む～
JP子どもの森づくり運動

特別協賛：日本郵政グループ



子森ネット

www.kodomonono-mori.net

NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク
info@kodomonono-mori.net

こどもの森づくりフォーラム実行委員会 委員名簿

敬称略

★こどもの森づくりフォーラム 実行委員長

氏名	組織名・役職	
安高 志穂 諏訪 幹夫	林野庁 森林整備部 森林利用 山村振興・緑化推進室長（～令和5年6月） 林野庁 森林整備部 森林利用 山村振興・緑化推進室長（令和5年7月～）	常任構成 団体
★ 沖 修司	公益社団法人国土緑化推進機構 専務理事	
塚原 茂	特定非営利活動法人子どもの森づくり推進ネットワーク 代表理事	
中崎 善匡	埼玉県 農林部 全国植樹祭推進課長	埼玉県 関係
茂木 崇嗣	秩父市 農林部長	
田嶋 哲也	小鹿野町 産業振興課長	
岡 眞司	公益社団法人埼玉県緑化推進委員会 代表理事	
半田 康	公益財団法人ニッセイ緑の財団 常務理事	
宮林 茂幸	東京農業大学 名誉教授	アドバイザー

アーカイブ

※動画・資料の各リンクは該当ページのQRコードをご参照ください。

Youtube 動画



こどもの森づくりフォーラム
in SAITAMA



農林水産省

maffchannel



YouTube「maffchannel」に「こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA」のページが開設されており、「全体ダイジェスト」の動画や、フォーラムの各プログラム別の動画が掲載されています。

登壇者発表資料



こどもの森づくりフォーラム
in SAITAMA

発表者資料（参加者公表用）



Google Driveの「フォーラム」「分科会I」「分科会II」ごとのフォルダに、発表者資料（参加者に公表可の資料のみ）を公開しています。

- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (1.開会式)
maffchannel・139 回視聴・4 か月前
- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (2.基調講演)
maffchannel・450 回視聴・4 か月前
- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (3.先進事例発表 I)
maffchannel・83 回視聴・4 か月前
- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (4.知事挨拶)
maffchannel・118 回視聴・4 か月前
- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (5.先進事例発表 II)
maffchannel・46 回視聴・4 か月前
- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (6.パネルディスカッション)
maffchannel・272 回視聴・4 か月前
- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (7.閉会の挨拶)
maffchannel・131 回視聴・4 か月前
- こどもの森づくりフォーラム in SAITAMA (全体ダイジェスト)
maffchannel・356 回視聴・4 か月前



こどもの森づくり フォーラム in SAITAMA

【主催】 こどもの森づくりフォーラム実行委員会

[実行委員会構成団体]

林野庁、(公社)国土緑化推進機構、(特非)こどもの森づくり推進ネットワーク、埼玉県、秩父市、小鹿野町、(公社)埼玉県緑化推進委員会、(公財)ニッセイ緑の財団

【後援】 文部科学省、環境省、こども家庭庁、(独)国立青少年教育振興機構、森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク、ESD活動支援センター・関東地方ESD活動支援センター、(一社)日本環境教育学会、日本自然保育学会、(公社)子ども環境学会、(一社)日本保育学会、(特非)全国認定こども園協会、(一社)全国認定こども園連絡協議会、(一社)全国保育士養成協議会、(社福)日本保育協会、国際校庭園庭連合日本支部、こどもエコクラブ全国事務局、(特非)自然体験活動推進協議会、(特非)樹木・環境ネットワーク協会、(公社)日本環境教育フォーラム、(公財)日本自然保護協会、(一社)日本森林インストラクター協会、(公財)日本生態系協会、日本ビオトープ管理士会、(特非)森づくりフォーラム

【特別協賛】



【助成】



【協賛】 (一社)東京林業土木協会、(公財)ニッセイ緑の財団、(一財)日本森林林業振興会
(公社)埼玉県緑化推進委員会